

三宝尊『仏母般若波羅蜜多円集要義釈論』の和訳 —三性説総説、遍計所執性、依他起性、および、円成実性—

飛田康裕

1. 『仏母般若波羅蜜多円集要義釈論』(*Prajñāpāramitāpiṇḍārthasamgrahavivarāṇa-) について
小稿においては、およそ5世紀後葉から6世紀中葉の人物と伝えられる!三宝尊 (dkon mchog gsum gyi 'bangs, *Triratnadāsa-) による『仏母般若波羅蜜多円集要義釈論』('phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin ma bsdus pa'i tshig le'ur byas pa'i rnam par 'grel pa, *Āryaprajñāpāramitāpiṇḍārthasamgrahavivarāṇa-, PrPPSV) の和訳を試みる。この『仏母般若波羅蜜多円集要義釈論』は、その前半部において、「十六空」が解説され、その後半部において、「十種分別散乱」(*vikalpavikṣepa-) が解説されるが、ここにおいて特に取り上げるのは、後半部の十種分別散乱の解説である。

この三宝尊の論書については、現在では、北宋の施護などによる漢訳、ならびに、ティラカカラシャ (Thig le bum pa, *Tilakakalaśa-) とローデンシェーラプ (Blo ldan shes rab) によるチベット語訳が存在するのみで、サンスクリット語の原文は既に散佚している。さらに、この漢訳については、綴文や潤文が未完と見えて、正確に読解することが困難である²。このため、和訳に際しては、専ら、チベット語訳に基づき、漢訳は参考までに括弧に入れて和訳に添えるにとどめた。

この『仏母般若波羅蜜多円集要義釈論』という著作は、『仏母般若波羅蜜多円集要義論』(Prajñāpāramitāpiṇḍārthasamgraha-, PrPPS) に対して三宝尊が施した註釈である。そして、その『仏母般若波羅蜜多円集要義論』は、およそ5世紀後葉から6世紀中葉の人物と推測される陳那 (phyogs kyi glang po, *Dignāga-) に帰されている。

そこで、まず、この陳那の著作について確認してみると、全体は58偈の韻文より成り、そのうち、第1偈から第5偈までは総説、第4偈から第18偈までは十六空の解説、第19偈から第54偈までは十種分別散乱の解説、そして、第55偈から第58偈までは総括という構成となっている³。なお、幸いなことに、

¹ 三宝尊、および、その『仏母般若波羅蜜多円集要義釈論』を扱う上で留意すべき点については、拙稿 [2020; § 1.2] 参照。

² 大竹 [2009] は、チベット語訳を参照しながら、この難解極まりない漢訳を訓読した労作である。なお、拙稿 [2020; p. (44), l. 21-p. (45), l. 4] においては、この三宝尊の論書の中に、「自性因」(*svabhāvahetu-) や「本性と矛盾することが知覚されること」(*svabhāvaviruddhopalabdhi-) などといった法称 (dharmakīrti-, ca. 6世紀中葉から7世紀中葉) に独特の術語が現れることを紹介したが、これらは既に大竹 [2009; p. 425, 註6] [2009; p. 421, 註6] において指摘されている。

³ 服部 [1961] 参照。

(46)

この陳那の著作については、サンスクリット語の原文を参照することができる⁴。

次に、これに対する三宝尊の注釈のうち、十種分別散乱の解説にあたる部分について確認してみると、概要は以下ようになる（なお、十種の「分別散乱」については、施護による漢訳の術語を用い、括弧内には、より一般的と思われる『大乘莊嚴經論』の漢訳の術語を添えた）。

[0] 十種分別散乱（十種散乱分別）総説	PrPPSV P344a4-/ D301b4-
[1] 無相分別散乱（無体分別）	PrPPSV P345a7-/ D302b5-
[2-1] 有相分別散乱（有体分別）	PrPPSV P346b3-/ D303b5-
[2-2] 三性説	
[2-2-0] 三性説総説	PrPPSV P347b8-/ D304b6-
[2-2-1] 遍計所執性	PrPPSV P348a7-/ D305a4-
[2-2-2] 依他起性	PrPPSV P348b3-/ D305a7-
[2-2-3] 円成実性	PrPPSV P348b6-/ D305b3-
[2-2-4] 三性説と般若經の經文との関係性	PrPPSV P349b2-/ D306a4-
[3] 俱相分別散乱（増益分別）	PrPPSV P351a4-/ D307b1-
[4-1] 毀謗分別散乱（損減分別）	PrPPSV P351b2-/ D307b6-
[4-2] 如来蔵	PrPPSV P351b6-/ D308a2-
[5] 一性分別散乱（一相分別）	PrPPSV P353b3-/ D309b2-
[6] 種種分別散乱（異相分別）	PrPPSV P354a3-/ D309b7-
・ 論証因（1）	PrPPSV P355a4-/ D310b7-
・ 論証因（2）：自己認識に関する議論	PrPPSV P355a7-/ D311a1-
・ 論証因（3）	PrPPSV P357a3-/ D312a5-
[7] 自性分別散乱（自相散乱分別）	PrPPSV P357a8-/ D312b1-
[8] 差別分別散乱（別相散乱分別）	PrPPSV P358a2-/ D312b7-
[9] 如名於義分別散乱（如名起義分別）	PrPPSV P358a6-/ D313a3-
[10] 如義於名分別散乱（如義起名分別）	PrPPSV P359a8-/ D313b7-

以上のうち、十種分別散乱総説（[0]）、無相分別散乱（*abhāvavikalpaviksepa-）の解説（[1]）、そして、

⁴ *Dignāga, sein Werk und seine Entwicklung*, ed. Erich Frauwallner, "Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens," Vol. 3, p. 140-p. 144, Wien : Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 1953.

有相分別散乱 (*bhāvakalpakṣepa-) の解説 ([2-1]) の和訳については、拙稿 [2020] において既に示してある⁵。よって、小稿においては、その続きとして、分別散乱との関連で説かれる三性説 ([2-2]) の和訳に着手するが、特にそのうちの三性説総説 ([2-2-0])、遍計所執性 (*parikalpitasvabhāva-) の解説 ([2-2-1])、依他起性 (*paratantrasvabhāva-) の解説 ([2-2-2])、そして、円成実性 (*pariniṣpannasvabhāva-) の解説 ([2-2-3]) を取り上げることにした。

三性説 ([2-2]) の和訳に臨むにあたって、ここまでの論の流れをまとめると、以下のようになる。

まず、陳那の『仏母般若波羅蜜多円集要義論』(PrPPS) の第 1 偈⁶によれば、「無二智」(advayaṃ jñānam, [所取・能取という] 二つのものを有しない智) こそが「達成されるべきもの」と考えられている。しかるに、現実には、十種の分別散乱 (*vikalpakṣepa-, [誤った] 構想という [心を] 散乱させるもの) を原因として、愚者たちの心は存在もせず本質的でもない外界の対象へと向かっているため、愚者たちにおいては無二智が達成されない。三宝尊の「[0] 十種分別散乱 (十種散乱分別) 総説」においては、このことを踏まえて、十種の分別散乱を排除することが、そのまま、無二智を達成するための修習となることを述べている⁷。この際に注目すべきは、陳那あるいは三宝尊の解釈においては、『般若波羅蜜多経』の経文の内容が十種の分別散乱自体を表しており、その分別散乱が相互に打破するものと打破されるものとなることにより排除されるという独創が見られる点である。というのも、世親 (vasubandhu-, ca. 4 世紀) などの伝統的解釈においては、『般若波羅蜜多経』の経文自体は真理を表しており、それによって十種の分別散乱が一方的に拒斥されると考えられているからである。例えば、『般若波羅蜜多経』には、(a) 「菩薩は [菩薩として] 存在している」あるいは (b) 「[菩薩は] 菩薩を見ない」などという経文が見られる。伝統的解釈においては、これらの経文は専ら真理を表していて、前者 (a) の真理は無相分別散乱 (存在するものを存在しないとみなす誤った構想) を一方的に拒斥⁸し、後者 (b) の真理は有相分別散乱 (存在

⁵ 拙稿 [2020] の誤植については、文末において*正誤表を示して訂正する。

⁶ PrPPS v. 1: prajñāpāramitā jñānam advayaṃ sā tathāgataḥ/ sādhyā tādarthayogena tācchabdyam granthamārgayoh// (般若波羅蜜多 (完成した智慧) は、無二智であり、それ (完成した智慧) が如来である。[般若波羅蜜多 (完成した智慧) は] 達成されるべきものであり、[[般若波羅蜜多経] の] 本文と [般若波羅蜜多 (完成した智慧) を顕在化させるための修行] 道とは、その目的 (完成した智慧) に適っているがゆえに、その語 ([般若波羅蜜多]) を有する ([般若波羅蜜多] という語で呼ばれる))。

⁷ 拙稿 [2020; p. (45), l. 16-p. (51), l. 5] 参照。

⁸ 伝統的解釈によれば、前者 (a) の経文は、「空性」あるいは「円成実 [相] を有するもの」が存在するという真理を表しているとされる。詳細については、以下のごとし。MSAVy 76, 8f.: [1] abhāvakalpakṣepa yasya pratipakṣeṇāha — prajñāpāramitāyāṃ iha bodhisattvo bodhisattva eva sann iti ([1] 無相分別 (無体分別) が [説かれたが、] こ [の分別] に対抗するもの (pratipakṣa-) として [般若波羅蜜多経] では [以下のことが] 説かれている—— [[シャーリプットラ (*śāriputra-) よ。] 菩薩 (bodhisattva-) が、この [完成した智慧

しないものを存在するとみなす誤った構想)を一時的に拒斥⁹すると考えられている。これに対して、陳

(**prajñāpāramitā*-) の中で [実践すべきことを実践しているときに] も、[その菩薩は] まさしく菩薩として存在しているが [云々] と) . Cf. MSBh P178a3/ D149a6: *byang chub sems dpa' nyid yod bzhin du zhes bya ba ste/ yod ces smos pas ni byang chub sems dpa' stong pa nyid kyi bdag nyid du yod pa'o//* ([「菩薩は、この完成した智慧の中で、実践すべきことを実践しているときも、]まさしく菩薩として存在しているが」と。 [般若波羅蜜多經] は、]「存在している」と言って、菩薩が、空性という個人原理 (*stong pa nyid kyi bdag, *śūnyatā*man-) を有して存在する [ことを示しているのである]) ; MSAVBh P244a8f./ D220b6ff.: *kun brtags kyi gang zag dang bral ba'i stong pa nyid dang/* (*dang/ P; dang D*) *yongs su grub pa ni yod pa yin la de'ang thams* ^[P244b1] *cad du med do* (*do D; do/ P*) *zhes bya ba la* (*zhes bya ba la D; zhes bya ba P*) *rnam par rtog pa'i gnyen por shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'bum las byang chub sems dpa' bos nas/* (*byang chub sems dpa' bos nas/ D; byang chub sems dpa' bos nas/ P*) *byang chub sems dpa' nyid kyi yod pa'o* (*yod pa'o D; yod pa'o/ P*) *zhes bka'* ^[D220b7] *stsal to//* (遍計所執の個人原理 (完全に [誤って] 構想された個人原理, *kun brtags kyi gang zag, *parikalpitapudgala*-) を欠いている [という] 空性 (空であるというあり方, *stong pa nyid, *śūnyatā*-)あるいは円成実[相] (完成した[特徴], *yong su grub pa, *pariṣpanna*-) は、存在するもの (*yod pa, *sat*-) であるが、そ [の空性や円成実相] さえ如何なるあり方でも存在しないとする分別 ([誤った] 構想, *rnam par rtog pa, *vikalpa*-) に対抗するものとして、『十万頌般若波羅蜜多經』では、「菩薩はまさしく [空性、あるいは、円成実相を個人原理とする] 菩薩として存在しているが」ということが説かれているのである) .

⁹ 伝統的解釈によれば、前者 (b) の経文は「遍計所執 [相] を有するもの」と「依他起 [相] を有するもの」が存在しないという真理を表しているとされる。詳細については、以下のごとし。MSAVy 76, 9f.: [2] *bhāvavikalpo yasya pratipakṣeṇāha — bodhisattvaṃ na samanupaśyāṭītyevamādi* ([2] 有相分別 (有体分別) が [説かれたが、] こ [の分別] に対抗するもの (*pratipakṣa*-) として [『般若経』では以下のことが] 説かれている——「[その菩薩は、] 菩薩を見ない」云々と) . Cf. MSBh P178a5f./ D149a7f.: [2] *byang chub sems dpa' yang dag par rjes su mi mthong ngo* ^[D149b1] *zhes bya ba ste/ kun tu brtags pa dang/ gzhan gyi dbang gi* ^[P178a6] *bdag nyid can gyi yang dag par rjes su mi mthong ngo* (*ngo D; ngo/ P*) *zhes bya bar dngos so//* ([2] 「[その菩薩は、] 菩薩を見ない」と。[ここでは、菩薩は、] 遍計所執 (*kun tu brtags pa, *parikalpita*-, 完全に [誤って] 構想されたもの) と依他起 (*gzhan gyi dbang, *paratantra*-, 他に依存するもの) を個人原理 (*bdag nyid, *ātman*-) とする [菩薩] を見ない、ということが意図されている.....) ; MSAVBh P 244b3f./ D220b7f.: *kun* ^[D221a1] *brtags kyi gang zag dngos po dang/ rang bzhin yod do* (*do D; do/ P*) *zhes mam par rtog pa'i gnyen por shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'bum las kyang byang chub sems dpa' ni mi* ^[P244b4] *dmigs pa'o* (*dmigs pa'o D; dmigs pa'o/ P*) *zhes bka' stsal te/* (遍計所執の個人原理 (*kun brtags kyi gang zag, *parikalpitapudgala*-, 完全に [誤って] 構想された個人原理) が、実有 (*dngos po, *dravya*-) として、あるいは、自性 (*rang bzhin, *svabhāva*-, 自存するあり方/ 独自のあり方) をもって存在するという分別 (*mam par rtog pa, *vikalpa*-, [誤った] 構想) に対抗するものとして、『十万頌般若波羅蜜多經』ではまた、「[その菩薩は、遍計所執を個人原理とする] 菩薩を見ない」ということが説かれているのである) ; MSU P181a5/ D229b5: *byang chub sems dpa' yang dag par rjes su mi mthong ba zhes bya ba la sogs pa ste/ kun brtags pa'i bdag nyid du med pa'i phyir ro//* ([「その菩薩は、] 菩薩を見ない」云々と。[菩薩は、] 遍計所執である個人原理 (*bdag nyid, *ātman*-) を有しては存在しないからである) . 「菩薩」の個人原理に付される言外の限定に「遍計所執」のみならず、「依他起」をも加える世親の解釈とは異なり、安慧 (*sthiramati*-, ca. 6 世紀) の『大乘莊嚴經論註疏』(MSAVBh) や無性 (*asvabhāva*-, ca. 6 世紀) の『撰大乘論釈』(MSU) では、これを「遍計所執」のみとする。拙稿 [2017; 註 35] 参照。

那や三宝尊の解釈においては、前者 (a) は有相分別散乱を表していて、無相分別散乱が優勢の場合にはこの有相分別散乱 (a) を活用して無相分別散乱を打破することができ、一方、後者 (b) は無相分別散乱を表していて、有相分別散乱が優勢の場合にはこの無相分別散乱 (b) を活用して有相分別散乱を打破することができるというように考えられているのである¹⁰。陳那や三宝尊がこのような特殊な解釈をしたのは、彼らがこの十種分別散乱に関する『般若波羅蜜多經』の經文を、**一先ずは**、修習に特化されたものとして理解したからであると考えられる。実に、この『般若波羅蜜多經』を享受する者には、熟達した菩薩のみならず、まだ「愚者」と呼ばれるような初学の菩薩たちも含まれる。尤も、享受する者が熟達した菩薩であれば、『般若波羅蜜多經』に表れる真理をあるがままに受け止めることもできよう。ところが、その真理は、余りに峻厳であるため、初学の菩薩にとっては必ずしも願望したものではない可能性がある。しかるに、『般若波羅蜜多經』は、このような初学の菩薩の願望をも満たしつつ、しかも、真理へと導くはずである。そこで、陳那や三宝尊は、『般若波羅蜜多經』の当該の經文もまた段階的に理解することが可能であると考えて、**一先ずは**、修習として解釈することにより、初学の菩薩の願望にも応えようとしたのではないかと考えられるのである¹¹。

さて、三宝尊の「[1] 無相分別散乱 (無体分別)」においては、一先ずは、以上のように修習に特化されたものとして『般若波羅蜜多經』が解説される。その際、初学の菩薩たちに生起する「無相分別散乱」(*abhāvavikalpavikṣepa-) は、「五蘊などは [世俗のものとしても] 存在しない」という分別と設定されている。そして、先述の通り、陳那と三宝尊は、この無相分別散乱が有相分別散乱 (*bhāvavikalpavikṣepa-) によって打破されると考えるが、彼らによれば、『般若波羅蜜多經』における「菩薩は [菩薩として] 存在している」という經文こそが有相分別散乱を表すものであるとされる。そして、そこにおける「菩薩」という語は「世俗の五蘊」の存在を提示していると言われる¹²。

同じく、三宝尊の「[2-1] 有相分別散乱 (有体分別)」においても、一先ずは、修習に特化されたものとして『般若波羅蜜多經』が解説される。そして、その際、初学の菩薩たちに生起する「有相分別散乱」(*bhāvavikalpavikṣepa-) は、「五蘊などは [眞実のものとしても] 存在する」という分別と設定されている。陳那と三宝尊は、やはり、この有相分別散乱が無相分別散乱 (*abhāvavikalpavikṣepa-) によって打破されると考えるが、彼らによれば、『般若波羅蜜多經』における「[菩薩は] 菩薩を見ない」という經文こそが無相分別散乱を表すものであるとされる¹³。

¹⁰ 拙稿 [2020; p. (51), l. 6-p. (54), l. 13] 参照。

¹¹ 拙稿 [2020; p. (54), l. 14-p. (55), l. 1] [2020; p. (57), l. 18-p. (58), l. 2] 参照。

¹² 拙稿 [2020; p. (55), l. 3-p. (58), l. 5] 参照。

¹³ 拙稿 [2020; p. (66), l. 4-p. (71), l. 15] 参照。なお、先に準じて解釈すれば、ここにおける「菩薩」は「勝

このように、陳那と三宝尊は、十種の分別散乱に関わる『般若波羅蜜多經』の經文を、一先ずは、修習に特化されたものとして解釈する。しかしながら、それは、当該の經文を、真理を開顯するものとみなす伝統的解釈を否定することを意味しない。彼らもまた、これらの經文が真理を指し示すものとしても働くと考えたことは、陳那の第 26 偈 (PrPPS) とそれに相応する三宝尊の註釈 (PrPPSV) により明らかになる。そこにおいては、「菩薩を見ない」という經文によって否定されるものは、誤って構想されているものだけであって、この經文によっても否定されずに残るものがあると述べられる¹⁴。世親などの伝統的な見解によれば、ここにおいて否定されずに残るものは「空性」である¹⁵。もっとも、この否定されずに残るものについて、陳那は、「空性」というような抽象的な物言いをせずに、より具体的に、それが「無二智」であることを仄めかす。さらに、三宝尊にいたっては、それが「清淨智」であることを明言して憚らない。よって、このことから翻つて、無相分別散乱に関連する『般若波羅蜜多經』の經文について考察すると、彼らもまた、熟達した菩薩たちによって考察されるときには、「菩薩は〔菩薩として〕存在している」という經文は、伝統的見解のごとくに「空性 (= 無二智 = 清淨智) が存在している」という真理を指し示すと考えていることが分かる¹⁶。

さて、以上のごとく、否定されるべき「〔勝義の〕五蘊」などと否定されずに残る「無二智」「清淨智」とが示されたところで、三宝尊の『仏母般若波羅蜜多円集要義釈論』(PrPPSV) においては、それらの関係性とそれらの成り立ちの仕組みを示す三性説が解説されることになる。

以下、その和訳に際しては、まず、陳那の『仏母般若波羅蜜多円集要義論』(PrPPS) のサンスクリット語原文・チベット語訳・サンスクリット語原文和訳を順に掲げ、次に、三宝尊の註釈 (PrPPSV) の和訳を掲げることとした。対応する漢訳の箇所情報については、それぞれの和訳の末尾に示してある。なお、和訳に先立ち、必要に応じて、簡素な解説を挿入した部分もある。また、三宝尊の註釈のチベット語訳の校訂テキストについては、紙幅の関係上、割愛し、別稿に譲ることにした。

義の五蘊」を提示していて、「菩薩を見ない」との言明はそれを否定していることになる。よって、ここにおいて意図されている「勝義の五蘊などは存在しない」という内容は、先述の「世俗の五蘊などは存在しない」という無相分別の内容からは密かに変更されていることになる。しかしながら、修習に特化される場合には、このような言外の意図の相違は、不問に付される (拙稿 [2020; p. (53), l. 26-p. (54), l. 6] 参照)。

¹⁴ 拙稿 [2020; p. (71), l. 16-p. (75), l. 1] 参照。

¹⁵ 註 8 参照。

¹⁶ 拙稿 [2020; p. (58), l. 6-p. (66), l. 2] 参照。

2. [2-2-0] 三性説総説

この三宝尊の著作は、陳那の著作に対する註釈であるから、勢い、三宝尊も、陳那と同じく、唯識思想に基づいて、これを解釈することとなる。しかしながら、この論書には、一般的な唯識思想に比して、三宝尊の特異性が顕著に表れている箇所が存する。その一つが、以下に示す三性説総説の部分である。

一般的な唯識思想における三性説は、虚妄分別 (abhūtaparikalpa-, 虚妄なものを分別するもの) を依他起性とする。そして、それを中心に据えて、虚妄分別を抛り所とする遍計所執性と虚妄分別の有する空性である円成実性とを説明する。ところが、これに対して、三宝尊の三性説は、円成実性を中心に据える。その際、三宝尊によって円成実性として定められるものは、空性ではなく、無二智 (*advayajñāna-) —— 所取 (把握される対象)・能取 (把握する認識) という形相を離れた知覚 —— である。そして、この無二智を基盤に据え、無二智の上に現れる所取・能取の顕現を依他起性とし、さらに、この所取・能取の顕現に対して付託される言葉や概念を遍計所執性とするというかたちで三性が説明される。以上のような特殊性は、三宝尊が、空性 (世俗の共相) よりも、むしろ、無二智 (勝義の自相) を主眼として円成実性を説いていたことに起因すると考えられる¹⁷。なお、三宝尊の三性説については、拙稿 [2019] において既に論じ、その和訳についても、そこにおいて一部示してあるが、以下には重複を恐れず、それらも提示することにする。

まず、陳那は、否定されるべきものと否定されずに残るものを示したところで、以下のようにして三性説に言及する。

PrPPS v. 27:

prajñāpāramitāyāṃ hi trīṇ samāśritya deśanā/
kalpitaṃ paratantraṃ ca pariniṣpannam eva ca//27//

G413b6/ P334b2/ N335a5f./ D293b4/ C300a5f.:

shes rab pha rol phyin par ni// bstan pa gsum la ^[N335a6] yang dag brten//
brtags pa dang ni gzhan dbang dang// yongs su (yongs su PNDC; yongsu G) ^[C300a6] grub pa kho na'o/

〔「これ (「菩薩は菩薩を見ない」という文) は、誤って構想されたものだけを否定するものである」というのが、「菩薩は菩薩として存在している」という文と「菩薩は菩薩を見ない」という文とを包括する見解である。〕 なぜなら、『般若波羅蜜多 [経]』においては、三 [つの存在] に基づいて説示

¹⁷ 拙稿 [2019]・小稿註 27 参照。

があるからである。[三つの存在とは、誤って] 構想されているもの、他に依存しているもの、そして、完成したものにほかならない。【T25, 913b8f.】

そして、三宝尊は、これに対して以下のように註釈する。

PrPPSV G430a3-430a6/ P347b8-348a4/ N349a4-7/ D304b6-305a2/ C311b6-312a2:

以上の内容は、どのようにして得心されるか、と [問うので] 曰く——『般若波羅蜜多 [經]』においては』云々と。『般若波羅蜜多』(shes rab pha rol phyin, *prajñāpāramitā-) と言われているが、般若波羅蜜多には二種類がある。[一つは、] 第一義的なもの (gtso bo) であり、[もう一つは、] 第二義的なもの (phal pa) である。このうち、第一義的な [般若波羅蜜多] とは、煩惱 [障] (nyon mongs pa, *kleśa-, 煩惱 [という覆い隠すもの]) と所知障 (shes bya'i sgrib pa, *jñeyāvaraṇa-, 知られるべきものを覆い隠すもの) を離れている [智慧¹⁸] である。[一方、] 第二義的な [般若波羅蜜多] とは、書かれた文字 (yi ge, *akṣara-) や名称 (ming, *nāman-) などによって説かれることを本性とする [經¹⁹] である。ここにおいては、以上のうちの [書かれた文字や名称などによって] 説かれることを本性とする『般若波羅蜜多 [經]』[のことが言われているの] である。『説示』(bstan pa, *deśanā-) とは、[対象を表述する] 語 (sgra, *śabda-) と [語によって表述される] 対象 (don, *artha-) とを本性 (ngo bo, *svabhāva-) として為されている説法 (chos bstan pa, *dharmadeśanā-) である。『なぜなら』(ni, *hi) という語は、何となれば (gang gi phyir, *yasmāt) という意味である。[その説示は、] 如何にして為されているか、と [問うので、] 曰く——『三 [つの存在] に基づいて』と。すなわち、三つ [の存在] (gsum po, *traya-) を依り所として [説示は] 為されるのである。この三つ [の存在] とは何か、と [問うので、] 曰く——『[誤って] 構想されているもの、他に依存するもの、そして、完成したものにほかならない』と。【T25, 906b11-21】

このようにして、「[誤って] 構想されているもの」(遍計所執性)・「他に依存するもの」(依他起性)・「完成したもの」(円成実性) という三性が示されたところで、三宝尊は、まず、「[誤って] 構想されて

¹⁸ 註 6 参照。PrPPSV P337a5f./ D295b7: gtso bo ni gynis su med ^[P337a6] pa'i ye shes kyi mtshan nyid do// (「第一義的な [般若波羅蜜多]」とは、無二智を特徴として有するものである)。

¹⁹ 註 6 参照。PrPPSV P337a6/ D295b7: phal pa ni gzhung dang lam gyi rang bzhin no// (「第二義的な [般若波羅蜜多]」とは、[[般若波羅蜜多經] の] 本文であること、あるいは、[般若波羅蜜多 (完成した智慧) を顕在化させるための修行] 道であることを本性として有するものである)。

いるもの」(遍計所執性)について、個別に解説を始める。

PrPPSV G430a6f./ P348a4f./ N349a7f./ D305a2f./ C312a2f.:

このうち、「誤って 構想されているもの」(brtags pa, *kalpita-, 遍計)とは、青など (sngon po la sogs pa, *nīlādi-) である。或るもの (A) が、[未だ] 清められていない智 (yongs su ma dag pa'i shes pa, *apariśuddhajñāna-) の上に、所取 (gzung ba, *grāhya-, 把握されるもの) や能取 ('dzin pa, *grāhaka-, 把握するもの) という多様なあり方で顕現している場合に、そ[の所取や能取という多様なあり方で顕現しているもの] (A) に対して [その青などが] 説かれるのである。[その青などは、] 愚者 (byis pa, *bāla-, 愚夫) たちによって [誤って] 構想されているものであるがゆえに [誤って構想されているものと呼ばれるの] である。【T25, 906b21f.】

ここにおいては、二つの存在が示されている。一つは、「所取や能取という多様なあり方で顕現しているもの」であり、もう一つは、「青など」の事物である。このうちの「青など」の事物は、所取・能取の顕現に対して「説かれる」ものであるから、実際には、「青」などという言葉、あるいは、概念と見なされる。いま、「[誤って] 構想されているもの」(遍計所執性) は、「青など」とされている。よって、「[誤って] 構想されているもの」(遍計所執性) は、具には、「青」などという言葉、あるいは、概念と考えられていることが知られる。²⁰

次に、三宝尊は「他に依存するもの」(依他起性)を解説して、以下のように述べる。

PrPPSV G430b1f./ P348a5f./ N349b1f./ D305a3f./ C312a3:

「他に依存しているもの」(gzhan gyi dbang, *paratantra-, 依他)とは、[所取・能取という二つのものの顕現である。] 或るもの (A) が、[所取・能取という] 二つのものを有しない智 (gnyis med pa'i shes pa, *advayajñāna-, 無二智) の上に、[すなわち、] それ自体 (rang gi ngo bo, *svabhāva-) [のみ] で確立しているもの (自性安住) の上に、無明に依存すること (ma rig pa'i dbang, *avidyātantra-) によって、二つのものとして顕現している場合、そ[の二つのものの顕現] (A) は、無明という [二つのものを有しない智とは] 別のものに依存しているがゆえに、他に依存しているものと呼ばれるのである。【T25, 906b22-25】

²⁰ 拙稿 [2019; p. (15), l. 4-p. (16), l. 1] 参照。

(54)

ここにおいてもまた、二つの存在が示されている。一つ目は、「[所取・能取という]二つのものを有しない智」(無二智)である。そして、二つ目は、「[所取・能取という]二つのものとして顕現している[もの]」である。このうち、「他に依存しているもの」(依他起性)は、「二つのものの顕現」と考えられていることが知られる。さらに、ここにおいては、もう一点、留意すべきことがある。それは、一つ目に示された「二つのものを有しない智」(無二智)が「それ自体 [のみ] で確立しているもの」と言い換えられていることである。そして、それ自体のみで確立しているということは、他の原因や条件によって形成されたものではないことを意味する。よって、無二智が独立自存する智と考えられていることも知られるのである。²¹また、この独立自存する無二智のあり方について考察すると、原因や条件によって形成されたものではないがゆえに、生滅などの変化を伴わず、変化を伴わないがゆえに、常住であると理解されることになる。つまり、無二智は、不変にして、常住と解されるのである。²²

最後に、三宝尊は、「完成したもの」(円成実性)を解説して、以下のように述べる。

PrPPSV G430b2f./ P348a6f./ N349b2f./ D305a4/ C312a4:

「完成したもの」(yong su grub pa, *pariniṣpanna-, 圓成實)と言われるが、所取と能取という形相を離れている**知覚**(rtogs pa, *saṃvedana-)がある場合、それ(所取と能取という形相を離れている知覚) [が完成したもの] である。そ [の所取と能取という形相を離れている知覚] は、[不変なものとして、そして、無顛倒なものとして] 完成しているがゆえに、完成したものと呼ばれるのである²³。【T25, 906b25f.】

ここでは、「完成したもの」(円成実性)として、「所取と能取という形相を離れている**知覚**」を挙げている。『中辺分別論』等の一般的な唯識説においては、虚妄分別にある「空性」を完成したもの(円成実性)として定める²⁴のに対して、「**知覚**」を完成したもの(円成実性)として挙げているところが、三宝尊

²¹ 拙稿 [2019; p. (16), l. 2-p. (17), l. 3] 参照。

²² 拙稿 [2018; p. (25), l. 20-p. (32), l. 1] 参照。

²³ Cf. MAVṬ 23, 7ff.: **grāhyagrāhakabhāvaḥ pariniṣpannaḥ svabhāva itī**. <nirvikārapariniṣpattyāvīparīta-pariniṣpattyā ca pariniṣpannatvāt pariniṣpanna ucyate.> MAVṬ_(tib) P32b5f/ D200a7: **gzung ba dang 'dzin pa med pa ni yongs su grub pa'i ngo bo ces bya ba ni mi 'gyur bar yongs su** ^[P32b6] grub pa dang/ phyin ci ma log par yongs su grub pas yongs su grub pa'i phyir/ yongs su grub pa'o zhes bya'o// **(所取と能取が存在しないことが、完成した独立する存在(円成実性)であるである)**と [言われている。所取と能取が存在しないことは、] 不変なものとして完成していることによって、そして、無顛倒なものとして完成していることによって、完成しているものであるがゆえに、完成したものと呼ばれるのである)。

²⁴ MAVBh 19, 15-20: abhūtaparikalpamātre sati yathā trayāṇāṃ svabhāvānām saṃgraho bhavati. **kalpitāḥ para-**

の極めて特異な点である。さらに、この知覚は、先の「他に依存するもの」(依他起性)の解説の中で現れた「[所取・能取という]二つのものを有しない智」と同じであるから、「それ自体[のみ]で確立しているもの」であることにもなる。つまり、不変にして常住なる智である²⁵。なお、この「それ自体[のみ]で確立している」智について、三宝尊は、自己認識(それ自身を認識している智)を想定しているようである²⁶。

以上の三性の関係性に注目すると、三宝尊の『仏母般若波羅蜜多円集要義積論』(PrPPSV)においては、まず、「[誤って]構想されているもの」(遍計所執性)である“青”などという言葉や概念は、「他に依存するもの」(依他起性)である「[所取・能取の顕現]に対して説かれる」とされる。そして、その「他に依存するもの」(依他起性)である所取・能取の顕現は、「完成したもの」(円成実性)である「二つのものを有しない智の上に……顕現している」とされている。このことから、「[誤って]構想されているもの」(遍計所執性)は「他に依存しているもの」(依他起性)に基づき、「他に依存しているもの」(依他起性)

tantraś ca pariniṣpanna eva ca/arthād abhūtakalpāc ca dvayābhāvāc ca deśitāḥ// [I. 5] arthaḥ parikalpitaḥ svabhāvāḥ. abhūtaparikalpaḥ paratantraḥ svabhāvāḥ. grāhyagrāhākābhāvāḥ pariniṣpannaḥ svabhāvāḥ (虚妄分別しか存在しない場合に、三つの自性が如何にして[虚妄分別に]統合されるか[を説いて曰く——]
[誤って]構想されたもの、他に依存するもの、そして、完成したもののみが[存在する。そして、それらは、それぞれ、]事物[という観点]から、虚妄分別[という観点]から、そして、二つのものが存在しないこと[という観点]から、示されたのである。[I. 5] [存在しないにもかかわらず、存在するものとして過剰に肯定されている対象や生類や自我や認識といった]事物が、遍計所執性(完全に[誤って]構想されている独自の存在)である。虚妄分別が、依他起性(他に依存している独自の存在)である。所取と能取が存在しないことが、円成実性(完成した独立する存在)である)。拙稿 [2019; § 2] 参照。

²⁵ 註 21・註 22 参照。

²⁶ PrPPSV P356a6ff./D311b3f.: rtogs ^[P356a7] pa'i rang bzhin ^[D311b4] rang rig pa tsaṃ ni 'dzin par byed pa'i sgras brjod pa ma yin no// 'di ltar rtogs par byed pa'i rang bzhin ni phan tshun ltos nas (ltos nas D; blos nas P) rab tu brtags pa ma yin te/ rang gi ^[P356a8] rgyu (rgyu P; rgyud D) las de ltar skyes pa'i phyir ro// (【定説者】しかし、覚知というあり方を有するもの、[すなわち、認識] それ自体の知覚だけは、能取という語によっては説かれていないのである。というのも、覚知というあり方を有するもの[である認識それ自体の知覚]は、互いに依存し合って構想されているものではないからである。[何となれば、覚知というあり方を有するものである認識それ自体の知覚は、認識] それ自体 [のみ] を原因 (rgyu, *hetu-) として、そのように [覚知というあり方で] 生ずるがゆえにである)。 Cf. AAJP 81,10-82, 4: na tu bodharūpaṃ svasaṃvedanamātrāṃ grāhakaśabdenocyate. na hi bodharūpaṃ parasparāpekṣāprakalpitam, svahetor eva tathotpannatvāt (しかるに、覚知というあり方を有するもの、[すなわち、認識] それ自体の知覚だけは、把握するものという語によっては説かれていないのである。というのも、覚知というあり方を有する[認識それ自体の知覚]は、相互に依存して構想されているものではないからである。[何となれば、覚知というあり方を有する認識それ自体の知覚は、認識] それ自体のみを原因として、そのように [覚知というあり方で] 生起しているがゆえにである)。拙稿 [2019; p. (17), l. 19-p. (18), l. 15] 参照。

は「完成したもの」(円成実性)に基づくことが分かる。つまり、三宝尊は、それ自体を原因として生ずる自己認識²⁷に「不変」という意味での「完成したあり方」²⁸を見出し、その円成実性(完成したもの)たる自己認識を根本に据えて三性を組み立てようとしたことが分かるのである。よって、これと一般的な三性説とを比較すると、一般的な三性説が空性というあり方を円成実性として設定するのに対して、三宝尊の三性説は自己を認識する知覚を円成実性と設定することが特異点となる。

3. [2-2-1] 遍計所執性

以上のように、「[誤って] 構想されているもの」(遍計所執性)・「他に依存するもの」(依他起性)・「完

²⁷ 円成実性を根本に据えるという三宝尊の三性説の特異性について、服部 [1961] においては、その要因を陳那の如来藏思想に求めている。たしかに、陳那が如来藏を志向し、識ないし無二智を以て「如来」にあてていたこと (PrPPS v. 1, v. 11, v. 35-v. 39) は、この特異性の一因と考えられる。しかるに、より直接的で決定的な要因は、三宝尊が、この識ないし無二智を自己認識と見なし、しかも、その自己認識を常住不変の智であると憚ることなく認めてしまったことにあると考えられる。同じく如来藏が志向される論書には、無著の『摂大乘論』(MS) がある。そこにおいては、虚妄分別 (*abhūtaparikalpa-) ないしアーラヤ識 (*alayavijñāna-) と呼ばれる識が種々の理論の中核に据えられている。しかし、その虚妄分別ないしアーラヤ識は、常住不変の智であるとまでは認められず、依他起性とされている。また、そこにおいて「如来」や円成実性にあてられているものは、空性であって、その空性はあくまでも依他起性という事物に存在するあり方にすぎない。勿論、この「空性」と呼ばれるものが所取・能取を欠いた無二智を暗に指すことは仄かに察せられるものの、そのことが明言されることは決してない。よって、そこにおいては、三性説もまた事物である依他起性を根本に据えて組み立てられることになる。このような意味において、まずは、陳那が、従来は空性とされていた「如来」を無二智と明言した影響は大きい(なお、空性(世俗の共相)を「如来」とする従来説は、世俗の智による認識の観点からの表述(拙稿 [2017; §3] 参照)であり、無二智(勝義の自相)を「如来」とする陳那説は、最高の智による認識の観点からの表述(拙稿 [2017; §3] 参照)であると考えられる。ここにおける両者の相違は、世俗の観点から説くか勝義の観点から説くかという表述方法の違いによるものであって、存在としては、世俗の共相はとりもなおさず勝義の自相とされる。よって、従来説と陳那説との違いは、実は、観点の違いにすぎないことになる)。そして、陳那の意を受けて、三宝尊が、この無二智を自己認識と規定し、さらに、その自己認識を常住不変の智と認めた影響はなお大きい。これによって、円成実性は、実はあり方ではなく、無二智という常住不変の事物であると公言されるに至ったのである(先と同様に、空性(世俗の共相)を円成実性にあてる従来説は、世俗の智による認識の観点からの表述であり、無二智(勝義の自相)を円成実性とする三宝尊説は、最高の智による認識の観点からの表述であると考えられる。よって、三宝尊は、無二智を常住不変の智と認めることにより、円成実性の解説にあたって、最高の智による認識の観点を全面的に打ち出したことになる)。是を以て、三宝尊においては、事物である円成実性を根本に据えて、三性説が組み立てられるようになったと考えられるのである。なお、『摂大乘論』(MS) の三性説の特徴については、兵藤 [2006] に詳しい。

²⁸ 註 49 参照。

成したもの」(円成実性)の三性の概要が示されたところで、次に、陳那は、この三性と『般若波羅蜜多經』との一般的関係性について解説する。すなわち、一般的に言って、数多ある『般若波羅蜜多經』群においては如何なる文言が三性の表徴となっているかの解説である。そして、この解説は、『大乘阿毘達磨經』(Abhidharmasūtra-)の偈文²⁹に則ったものであることが推測される。また、この『大乘阿毘達磨經』

²⁹ MAVṬ 112, 5-11: <prakṛtīgāmbhūryasya prajñāpāramitārūpasya trisvabhāvadvēnābhrāntipra>tipattyartham ity anye. evaṃ hy uktam abhidharmasūtraḡāthādvaye māyādiśaṇā bhūte kalpitān nāstideśaṇā/ caturvidhaviśuddhes tu pariniṣpannadeśaṇā/ suddhiḥ prakṛtivai<maḡyam ālambanaṃ ca mārgatā/ viśuddhānāṃ hi dharmānāḡ caturvidhagrāhūtvam// iti.>; MAVṬ (tib.) P83b8-84a7/ D243b1-6: gzhan dag na re shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i tshul rang bzhin ^[D243b2] gyis zab pa ngo bo nyid gsum gyi sgo nas ma nor bar rtogs par bya ba'i phyir ro zhe'o// de skad du chos mngon pa'i mdo'i nang nas tshigs su bcad pa gnyis las/ byung rten sgyu ma la sogs bstan// rtags la brten nas med pa bstan// rnam dag rnam pa bzhi rten nas// ^[D243b3] yongs su grub pa bstan pa yin/ dag pa de ni rang bzhin dang// dri ma med dang lam dang dmigs// rnam par dag pa'i chos kyi rnam// rnam pa bzhi pos bsdu pa yin// zhes gsungs so// byung ba gzhan gyi dbang gi ngo bo nyid la ltos nas mdo las sgyu ma la sogs ^[D243b4] pa bstan te/ de ni sgyu ma la sogs pa bzhin du log par snang ba'i phyir ro// med pa kun brtags pa'i ngo bo nyid la ltos nas med pa bstan to// rnam par dag pa rnam pa bzhi la ltos nas yongs su grub par bstan to// rnam par dag pa rnam pa bzhi la rang bzhin gyis rnam ^[D243b5] par dag pa ni dri ma dang bcas pa'i dus kyi de bzhin nyid la sogs pa'o// dri ma med pas rnam par dag pa ni de dag nyid dri ma med pa'i dus na'o// stong pa nyid la sogs pa 'thob pa'i lam rnam par dag pa ni byang chub kyi phyogs la sogs pa'o// lam skyed pa'i phyir dmigs pa ^[D243b6] rnam par dag pa ni chos kyi dbyings kyi rgyu mthun pa bstan pa'i chos mdo'i sde la sogs pa ste/ de la brten nas lam skye ba'i phyir ro// 'di ltar rnam par dag pa 'di bzhis rnam par byang ba'i chos thams cad bsdu te tshigs su bcad pa gnyis kyi don mdor bsdu pa'o// (或る人々は言う——本質的に深遠な『般若波羅蜜多 [經]』の教理を三種の自性を通して[人々に]過つことなく理解させるために[三種の自性が考慮されなければならないのである。]というも、『阿毘達磨經』の二首の偈文において、以下のように説かれているからである——〔大乘の教えの説示においては、存在しているもの (bhūta-) [を示さん] がために、幻など (māyādi-) が説かれている。〔そして、〕〔誤って〕 構想されているもの (kalpita-) として、存在しないということ (nāsti-) が説かれている。一方、四種の清らかなもの (*caturvidhaviśuddhi-) が、完成しているもの (*pariniṣpanna-) として説かれている。〔この四種の清らかな事物とは、〕 本性 [的に清らかなもの] と穢れを離れている [ことにより清らかなもの] (*prakṛtivaimalya-) であり、拠り所 (*ālambana-) [という清らかなもの] であり、そして、道であること (*mārgatā-) という清らかなもの (*suddhi-) である。実に、[すべての] 清浄なる事物は、[この] 四種 [の清らかなもの] に集約される、と。〔存在しているもの [を]〕 (byung ba, *bhūta-) [すなわち、] 他に依存する独自の存在 (gzhang gyi dbang gi ngo bo nyid, *paratantrasvabhāva-, 依他起性) [を示さん] がために、經典の中では、「幻などが説かれている」のである。〔何となれば、] それ (依他起性) は、幻などのごとくに、顛倒したあり方を有して顕現するからである。存在しない [にもかかわらず存在するかのよう] に完全に [誤って] 構想された独自の存在 (kun brtags pa'i ngo bo nyid, *parikalpitasvabhāva-, 遍計所執性) として、「存在しないということが説かれている」のである。「四種の清らかなもの」が、「完成しているものとして説かれている」のである。「四種の清らかなもの」のうちの、本性的に清らかなものとは、穢れを有しているときの真如 (de bzhin nyid, *tathatā-) などである。穢れを離れていることにより清らかなものとは、その同じ [真如など] が穢れを離れたときに [そのように呼ばれ

(58)

の偈文に則って三性と『般若波羅蜜多經』との一般的関連性を解説した論書には、無著による『撰大乘論』(*Mahāyānasamgraha-, MS)がある。このため、陳那の解説は『撰大乘論』と酷似するものになっている。

まず、三性のうち、「[誤って] 構想されているもの」(遍計所執性)と『般若波羅蜜多經』との一般的関連性について、陳那は、以下のように解説する。

PrPPS v. 28ab:

nāstītyādīpadaiḥ sarvaṃ kalpitam vinivaryate/ [28ab]

G413b6f./ P334b2f./ N335a6/ D293b5/ C300a6:

[D293b5] med ces bya [G414a1] la sogs tshig gis// [P334b3] brtags pa thams cad 'gog pa ste//

「存在しない」云々という『般若波羅蜜多經』の章句によって、「[誤って] 構想されているものが、すべて、取り除かれる。【T25, 913b10】

これによれば、『般若波羅蜜多經』における「存在しない」などという否定的言明は、すべて、「[誤って] 構想されているもの」(遍計所執性)を否定するためにあるということになる。

これと同様の主張は、『撰大乘論』(MS)においても、以下のようなかたちで展開されている——「仏世尊たちは、何であれ、広大な大乘 [の教え] を説示なさったが、その [広大な大乘の教えの] 説示の中の遍計所執性 (*parikalpitasvabhāva-) は、如何にして理解されるか、と [対論者が問うので] 曰く—— [遍計所執性は、] 「存在しない」 (*nāsti-) [という語] の同義語の説示によって理解される³⁰」。

さて、以上の陳那の偈文について、三宝尊は、以下のように註釈する。

PrPPSV G430b3-6/ P348a7-348b3/ N349b3-6/ D305a4-7/ C312a4-7:

るのである。] 空性などを獲得するための道という清らかなものとは、菩提分 [法] などである。[その] 道を生起させるがゆえに、拠り所という清らかなものとは、法界 [という原因] から生じた [法界と同じ清らかな性質を有する結果] (chos kyi dbyings kyi rgyu mthun pa, *dharmadhātuni<h>syanda-) である、経蔵などの [大乘において] 説かれている教えである。[何となれば、] それ (経蔵などの大乘において説かれている教え) を拠り所として、[空性などを獲得するための] 道が生起するからである。すべての「清浄なる事物」は、この「四種」の清らかなものに「集約される」のである。[『阿毘達磨經』の] 二首の偈文の内容は、以上のように要約される)。

³⁰ MS P21a5f./ D18b7f.: sangs rgyas bcom ldan 'das [P21a6] mams kyis [kyis D; kyī P] theg pa chen po shin tu rgyas pa bstan pa gang yin pa'i bstan pa der kun tu brtags pa'i ngo bo nyid ji ltar rig par bya zhe na/ med pa'i nram grangs [D19a1] bstan pas rig par bya'o//

『般若波羅蜜多經』における] 三 [つの存在] に基づく説示は如何にして [なされるの] か、と [問うので、] 『般若波羅蜜多經』との 関連性 [を示すこと] によって曰く—— 「「存在しない」云々という『般若波羅蜜多經』の章句によって、[誤って] 構想されているものが、すべて、取り除かれる」云々と。「「存在しないという」(med ces bya ba, *nāstīti) とは、[すなわち、] 存在するものではないという、ということである。「云々 [という章句によって]」(sogs pa, *ādi-) [とは、すなわち、] 斯く斯く然々と説かれる 『般若波羅蜜多經』の] 「章句」(tshig, *pada-) の類 (mam pa, *prakāra-) によって、[ということ] である。「云々」(sogs pa, *ādi-) という語によって、[誤って構想されているものの] 否定の説示は [「存在しない」(*nāsti) という章句とは] 別 [の章句] によっても為される、ということが説かれているのである³¹。「「誤って] 構想されているものが、すべて、取り除かれる」(brtags pa thams cad 'gog pa ste, *sarvaṃ kalpitaṃ vinivaryate) と [説かれる。] 「すべて」(thams cad, *sarva-) とは、余すところなく [という意味である。] 「「誤って] 構想されているもの」(brtags pa, *kalpita-) とは、構想するもの (rtog pa, *kalpanā-) の所作 (bzo) によって [名称³²と] 結びつけられたものである。「取り除かれる」('gog pa, *vinivaryate) とは、否定される [という意味である。] この文 (gzhung, *grantha-) によっては、以下のことが意図されている—— [すなわち、] こ [の『般若波羅蜜多經』] において、何であれ、否定の章句が聞かれた場合には、そ [の否定の章句] によって、[誤って] 構想されている全ての事物が否定されていると理解されるべきである、ということが説かれているのである。【T25, 906b26-906c7】

4. [2-2-2] 依他起性

次に、三性のうち、「他に依存するもの」(依他起性) と『般若波羅蜜多經』との一般的関連性について、陳那は、以下のように解説する。

PrPPS v. 28cd:

māyopamādidr̥ṣṭāntaiḥ paratantrasya deśanā// [28cd]

³¹ PrPPSV G430b4/ P348b1/ N349b4f./ D305a5f./ C312a5: **sogs pa**i sgras ni dgag par (dgag par GPN; dgag pa DC) rjod par byed pa (rjod par byed pa PN; brjod par byed pa G; rjod par byed DC) gzhan ^[D305a6] gyis ^[N349b5] kyang byed pa yin no (byed pa yin no P; byed pa yino GN; byed pa ma yin no DC) zhes brjod pa yin no// (zhes brjod pa yin no// DC; // GPN)-

³² Cf. PrPPSV P347a3/ D304a4: gang zhig ming du btags pa de yang/ shes rab kyiis (shes rab kyiis D; ges rab kyiis P) ma dmings pa'o// (或るもの (A) が、名称を通して [誤って] 構想されている場合、その (A) もまた、智慧によって認識対象とされないものである)。

G414a1/ P334b3/ N335a6f./ D293b5/ C300a6:

sgyu ma la sogs dpe nmams kyis// gzhan gyi dbang ni yang ^[N335a7] dag bstan//

「幻のようなもの」などという『般若波羅蜜多經』の喩例によって、他に依存しているものが説示される。【T25, 913b11】

これによれば、『般若波羅蜜多經』における「幻」などという喩例は、すべて、「他に依存するもの」(依他起性)の表徴であるということになる。

そして、これと同様の主張は、やはり、『撰大乘論』(MS)においても、以下のようなかたちで展開されている——「[広大な大乘の教えの説示の中の] 依他起性 (*paratantrasvabhāva-) は、如何にして理解されるか、と[対論者が問うので]曰く——[依他起性は、]幻 (*māyā-)³³や蜃気楼 (*marīci-)³⁴や夢 (*svapna-)³⁵や幻影 (*pratibhāsa-)³⁶や鏡像 (*pratibimba-)³⁷や反響 (*pratiśrutkā-)³⁸や水に映った月 (*udakacandra-)

³³ Cf. MS P21b7/ D19a7: don med pa ji ltar (don med pa ji ltar D; ji ltar na med pa P) spyod yul du 'gyur snyam du sems pa de dag gi som nyi za ba de bzlog pa'i phyir **sgyu ma** lta ba nyid do// ([外界の] 事物が存在しないならば、どうして、[認識の] 対象領域 (*gocara-) があろうか、と [或る人々は] 考えるので、彼らにおけるこの疑いを除去するために、幻 (sgyu ma, 幻事, *māyā-) の喩例が [説かれているので] ある)。

³⁴ Cf. MS P21b7f./ D19a7f.: sems dang sems ^[P21b8] las byung ba don med pa nmams ji ^[D19b11] ltar 'byung (byung P; dbyung D) snyam du som nyi za ba bzlog pa'i phyir **smig rgyu** lta bu nyid do// ([外界の] 事物が存在しないならば、どうして、心 (*citta-) と心所 (*caitta-) が生起しようか、という疑いを除去するために、蜃気楼 (smig rgyu, 陽炎, *marīcikā-) の喩例が [説かれているので] ある)。

³⁵ Cf. MS P21b8f./ D19b1: don med na 'dod pa dang mi 'dod pa'i nyer bar spyod par ji ltar 'gyur snyam du som nyi za ba bzlog pa'i ^[P22a1] phyir **rmi lam** lta bu nyid do// ([外界の] 事物が存在しないならば、どうして、望ましい [感受] (*iṣṭa-) や望ましくない [感受] (*aniṣṭa-) を享受すること (*upabhoga-) があろうか、という疑いを除去するために、夢 (rmi lam, 所夢, *svapna-) の喩例が [説かれているので] ある)。

³⁶ Cf. MS P22a2/ D19b2: don med na ji ltar nmam par shes pa sna tshogs 'byung snyam du som nyi za ba bzlog pa'i phyir **mig yor** lta bu nyid do// ([外界の] 事物が存在しないならば、どうして、種々の認識 (*vijñāna-) が生じようか、という疑いを除去するために、幻影 (mig yor, 光影, *pratibhāsa-) の喩例が [説かれているので] ある)。

³⁷ Cf. MS P22a1f./ D19b1f.: don med na las dge ba dang (dang D; dang/ P) mi dge ba nmams kyi 'bras bu 'dod pa dang mi 'dod pa ji ltar mngon ^[D19b2] par 'grub par 'gyur snyam du som nyi za ba bzlog pa'i phyir ^[P22a2] **gzugs brnyan** lta bu nyid do// ([外界の] 事物が存在しないならば、どうして、善 (*kuśala-) なる [行為] や不善 (*akuśala-) なる行為 (las, 業, *karman-) が望ましい [結果] (*iṣṭa-) や望ましくない (*aniṣṭa-) 結果 (*phala-) を引き起こすことがあろうか、という疑いを除去するために、鏡像 (gzugs brnyan, 影像, *pratibimba-) の喩例が [説かれているので] ある)。

³⁸ Cf. MS P22a2f./ D19b2f.: don med na ji ltar tha snyad brjod pa sna tshogs 'byung snyam ^[P22a3] du som nyi za ba bzlog pa'i ^[D19b3] phyir **brag ca** lta bu nyid do// ([外界の] 事物が存在しないならば、どうして、種々の言語的

³⁹や化身 (*nirmāṇa-) ⁴⁰のごとし [という喩例] によって理解される⁴¹] と。

以上の陳那の偈文について、三宝尊は、以下のように註釈する。

PrPPSV G430b6-431a3/ P348b3-6/ N349b6-350a2/ D305a7-305b3/ C312a7-312b2:

以下のように、「幻のようなもの」などという『般若波羅蜜多經』の喩例によって、他に依存するものが説示される (sgyu ma la sogs dpe rnam kyis// gzhan gyi dbang ni yang dag bstan//, *māyopamādi-drṣṭāntaiḥ paratantrasya deśanā//) と言われるが、「幻のようなもの」 (sgyu ma, *māyopama-) とは、インドラの網 (mig 'phrul, *indrajāla-) などという他者を欺くこと (slu bar byed pa, *vañcaka-) を本性として有するものである⁴²。「喩例 [によって]」 (dpe, *drṣṭānta-) とは、譬喩 (nye bar 'jal bar byed pa, *upamāna-) [によって、すなわち、] 同じ特性を有するもの (chos mthun pa, *sādharmya-) [によって、すなわち、] 類似するもの (de lta bu, *sādṛśya-) によって [という意味である。] 「など」 (sogs pa, *ādi-) という語によって、ガンダルヴァの都城 (dri za'i grong khyer, *gandharvanagara-) などが [暗示されている。] まさしく、以上のような喩例によって、すなわち、「幻のようなもの」などという喩例によって [世尊により] 説かれたものが「説示される [もの]」 (yang dag bstan pa, *deśanā-) であって、その [仏弟子により] 聞かれたものが「他に依存しているもの」 (gzhan gyi dbang, *paratantra-) であると理解されるべきである。 [つまり、ここにおいては、] 以上のように、『般若波羅蜜多經』の何処であれ (A)、幻のようなものなどに喩えられて、[或る] 事物 (B) が、世尊によって説示されている場合、そこ (A) においては、[その事物 (B) は、] 他に依存しているもの (gzhan gyi dbang, *paratantra-) として説かれていると確信されるべきである、ということが言われているのである。

営為 (*vyavahāra-) や説示 (*deśanā-) が生じようか、という疑いを除去するために、反響 (brag ca, 谷響, *pratiśrutka-) の喩例が [説かれているので] ある。

³⁹ Cf. MS P22a3/ D19b3: don med na ji ltar yang dag par 'dzin pa'i ting nge 'dzin gyi spyod yul 'byung snyam du som nyi za ba bzlog pa'i phyir **chu zla** lta bu nyid do// ([外界の] 事物が存在しないならば、どうして、[事物を] 正しく把握するものである三昧 (*samādhi-) の対象領域 (*gacara-) が出現しようか、という疑いを除去するために、水に映った月 (chu zla, 水月, *udakacandra-) の喩例が [説かれているので] ある)。

⁴⁰ Cf. MS P22a3f./ D19b3f.: don med na byang chub sems ^[P22a4] dpa' sems phyin ci ma log pa (phyin ci ma log pa D; phyin ci log pa P) rnam sems can gyi bya ba sgrub pa'i phyir bsams bzhin du ji ltar skye snyam du som ^[D19b4] nyi za ba bzlog pa'i phyir **sprul pa** lta bu nyid bstan to// ([外界の] 事物が存在しないならば、心の顛倒していない菩薩たちが、有情への奉仕を為し遂げるために、どうして、故意に生を受けることがあろうか、という疑いを除去するために、化身 (sprul pa, 變化, *nirmāṇa-) の喩例が説かれているのである)。

⁴¹ MS P21a6f./ D19a1: gzhan gyi dbang gi ^[P21a7] ngo bo nyid ji ltar rig par bya zhe na/ sgyu ma dang / smig rgyu dang / rmi lam dang / mig yor dang / gzugs brnyan dang / brag ca dang / chu zla dang / sprul pa lta bur rig par bya'o//

⁴² Cf. AKBh 313, 13: tatra paravañcanā māyā (このうち、誑 (māyā-) とは、他者を欺くものである) 。

(62)

【T25, 906c7-14】

5. [2-2-3] 円成実性

最後に、三性のうち、「完成したもの」（円成実性）と『般若波羅蜜多經』との一般的関連性について、陳那は、以下のように解説する。

PrPPS v. 29ab:

caturdhāvyavadānena pariniṣpannakīrtanam/ [29ab]

G414a1/ P334b3/ N335a7/ D293b5/ C300a6:

rnam par byang ba bzhi yis ni// yongs su (yongs su PNDC; yongsu G) grub pa rab tu bsgrags//

四種の明浄なるものによって、[世尊は]完成した[もの]を陳述なさっているのである。【T25, 913b12】

これによれば、四種の明浄なるもの（四清浄法）が、「完成したもの」の表徴ということになる。ところが、『般若波羅蜜多經』の中では、四種の明浄なるものが直接的に説かれることはない。このため、「完成したもの」については、読者なり誦者なりが、機に臨んで、『般若波羅蜜多經』の言外の意図を汲み取らなければならないことになる⁴³。

例によって、『摂大乘論』（MS）を参照すると、これと同様の主張は、以下のようなかたちで展開されている——「[広大な大乘の教えの説示の中の] 円成実性（*pariniṣpannasvabhāva-）は、如何にして理解されるか、と[対論者が問うので]曰く——[円成実性は、]四種の清浄なる事物（*caturvidhaviśuddhadharma-）の説示によって理解される⁴⁴」と。

以上の陳那の偈文について、三宝尊は、以下のように註釈する。

PrPPSV G431a3-5/ P348b6-349a1/ N350a2-5/ D305b3-5/ C312b2-4:

⁴³ PrPPSV P349b7/ D306b1: grub pa la ni nges pa med pa kho nas ji ltar srid pa (srid pa D; srad pa P) bzhin du rnam par 'jog pa yin no/ (完成したものについては、[説示に関する] 定型がないので、可能性に応じて (ji ltar srid pa bzhin du, *yathāsambhavam)、[その場にふさわしい説示の方法で、完成したものが] 確立されるのである)。

⁴⁴ MS P21a7f./ D19a1f.: yongs su grub ^[P21a8] pa'i ngo bo ^[D19a2] nyid ji ltar rig par bya zhe na/ rnam par byang ba'i chos rnam pa bzhi bstan pas rig par bya ste/.

完成した独立する存在 (yong su grub pa'i rang bzhin, 圓成自性, *pariṇiṣpannasvabhāva-) の説示 (bstan pa, 説, *deśanā-) は、[世尊によって] どのようになされているか、と [問うので、陳那の] 解説して曰く——「四種の明浄なるものによって、[世尊は] 完成した [もの] を陳述なさっているのである」と。「[世尊は] 完成した [もの] を陳述なさっている」(yongs su grub pa'i ngo bo nyid rab tu bsgrags, pariṇiṣpannakīrtanam) [すなわち、] 説明なさっているのである。[世尊は] どのようにして [完成したものを陳述なさっているの] か、と [問うので、] 曰く——「四種の明浄なるものによって」(rnam par byang ba bzhi yis ni, 以四種清浄, *caturdhāvyavadānena) [陳述なさっているのである] と。「四種」(bzhi, 四種, *catardhā) とは、四種類 (rnam pa bzhi, 四種類, *catuḥprakāra-) である。「明浄なるもの」(rnam par byang ba, 清浄, *vyavadāna-) とは、清らかなもの (rnam par dag pa, 無染, *viśuddhi-) である。この種のもの (rnam pa) は、[煩惱障と所知障という穢れを] 浄化するがゆえに、「明浄なるもの」(rnam par byang ba, 清浄, *vyavadāna-) である⁴⁵。また、明浄なるもの (rnam par byang ba, *vyavadāna-) であって、そして、[その明浄なるものが] 四種 (bzhi, *caturdhā-) である [持業釈: 同格限定複合語] ので、「四種の明浄なるもの」(rnam par byang ba bzhi, *caturdhāvyavadāna-) である。

【T25, 906c14-21】

三宝尊は、以上のように陳那の偈文を註釈したところで、次に、「四種の明浄なるもの」について個々に説明する。ここで言われる「四種の明浄なるもの」とは、[1]「本来的に清らかなもの」(自性清浄)、[2]「穢れから離れることにより清らかなもの」(離垢清浄)、[3]「[修行の] 拠り所という清らかなもの」(所縁清浄)、そして、[4]「[法界から] 生じ [法界と] 同じ性質を有する [結果] という清らかなもの」(平等清浄) である。

PrPPSV G431a6/ P349a1f./ N350a5/ D305b5/ C312b4f.:

[この四種の明浄なるものとは、] すなわち、^[1] 本来的に清らかなもの (rang bzhin gyis rnam par byang ba, 自性清浄, *prakṛtīviśuddhi-/°vyavadāna-), ^[2] 穢れを離れることにより清らかなもの (dri ma med pa'i rnam par byang ba, 離垢清浄, *vaimalyaviśuddhi-/°vyavadāna-), ^[3] [修行の] 拠り所という清らかなもの (dmigs pa'i rnam par byang ba, 所縁清浄, *āmbanaviśuddhi-/°vyavadāna-), そして、^[4] [法界から] 生じ [法界と] 同じ性質を有する [結果] (等流) という清らかなもの (rgyu mthun pa'i rnam par byang ba, 平等清浄, *niḥśyandaviśuddhi-/°vyavadāna-) である。【T25, 907a7f.】

⁴⁵ PrPPSV G431a5/ P348b8/ N350a4/ D305b4/ C312b4: rnam par byang bar byed pas na rnam par byang ba ste rnam pa'o//.

ところで、陳那は、この自著の第1偈において、「般若波羅蜜多」(parajñāpāramitā-) という語で呼ばれるものを3つに分類し、(1)「無二智」(完成した智慧)と(2)「[般若波羅蜜多(完成した智慧)を顕在化させるための修行]道」と(3)「[[般若波羅蜜多経]の]本文」であるとしている⁴⁶。

さらに、三宝尊は、これを説明する際に、(I)「第一義的なもの」(gtso bo)と(II)「第二義的なもの」(phal pa)という分類を導入して、陳那における(1)「無二智」(完成した智慧)のみを(I)「第一義的な[般若波羅蜜多]」に配当し⁴⁷、(2)「[般若波羅蜜多(完成した智慧)を顕在化させるための修行]道」と(3)「[[般若波羅蜜多経]の]本文」は(II)「第二義的な[般若波羅蜜多]」に配当している⁴⁸。

上述の「四種の明浄なるもの」については、概して言えば、陳那が3つに分類した「般若波羅蜜多」のいずれかに該当する。

まず、(I)「第一義的な[般若波羅蜜多]」に配当される(1)「無二智」(完成した智慧)は、さらに、未だ穢れから離れていない場合と既に穢れから離れている場合とに分けられるが、未だ穢れから離れていない無二智は、[1]「本来的に清らかなもの」(自性清浄)に、そして、既に穢れから離れている無二智は、[2]「穢れから離れることにより清らかなもの」(離垢清浄)にあてられている⁴⁹。

そして、(II)「第二義的な[般若波羅蜜多]」に配当される(2)「[般若波羅蜜多(完成した智慧)を顕在化させるための修行]道」は、[3]「[修行の] 拠り所という清らかなもの」(所縁清浄)に、そして、(II)「第二義的な[般若波羅蜜多]」に配当される(3)「[[般若波羅蜜多経]の]本文」は、[4]「[法界から] 生じ[法界と] 同性質を有する[結果]という清らかなもの」(平等清浄)にあてられている⁵⁰。

⁴⁶ 註6参照。

⁴⁷ 註18参照。

⁴⁸ 註19参照。

⁴⁹ 世親は、(i)「不変なもの」(*nirvikāra-)という観点と(ii)「無顛倒なもの」(*aviparīta-)という観点から、「四種の明浄なるもの」(四清浄法)を分類するが、三宝尊の(I)「第一義的な[般若波羅蜜多]」は、世親の言うところの(i)「不変なもの」に該当する。MSBh P180b6f./D151a6f.: de la dang po^[D151a7] gnyis ni mi^[P180b7] gyur bar yongs su grub pa nyid kyi yongs su grub ba'o// (それら[四清浄法の]うち、初めの二つ(本来的に清らかなものと穢れを離れていることにより清らかなもの)は、不変なもの(mi'gyur ba, 無有變異,*nirvikāra-)として完成していること(yongs su grub pa nyid, 圓成實,*pariṇiṣpannatva-)によって、完成したもの(yongs su grub pa, 圓成實,*pariṇiṣpanna-)である)。Cf. MAVṬ 23, 8f. 註23参照。

⁵⁰ 三宝尊の(II)「第二義的な[般若波羅蜜多]」は、世親の言うところの(ii)「無顛倒なもの」に該当する(註49参照)。MSBh P180b7/D151a7: phyi ma ni phyin ci ma log par yongs su grub ba yin no// ([一方、四清浄法のうち、]後の[二つ](道という清らかなものと拠り所という清らかなもの)は、不顛倒なもの(phyin ci ma log pa, 無有顛倒,*aviparīta-)として[完成していることによって、]完成したもの(yongs su grub pa, 圓成實,*pariṇiṣpanna-)である)。Cf. MAVṬ 23, 8f. 註23参照。

以上の「四種の明浄なるもの」(四清浄法)の内容については、無著による『摂大乘論』(MS)においても大差は見られない。しかしながら、その呼称については、両者の間に相違が見られる。すなわち、(II)「第二義的な[般若波羅蜜多]」に配当される(2)「[般若波羅蜜多(完成した智慧)を顕在化させるための修行]道」は、『摂大乘論』においては「それ(穢れを離れていることにより清らかなもの)を獲得するための道という清らかなもの」(de thob pa'i lam nram par byang ba, 得此道清浄)なる語で呼ばれ、そして、(II)「第二義的な[般若波羅蜜多]」に配当される(3)「[[般若波羅蜜多経]の]本文」のほうが、むしろ、「それ(道という清らかなもの)を生起させるための拠り所という清らかなもの」(de bskyed pa'i phyir dmigs pa nram par byang ba, 生此境清浄)なる語で呼ばれているのである。ここに、三宝尊と無著における伝統の違いを知ることができる。これをまとめると、以下の図のようになる。

三宝尊による 般若波羅蜜多の分類	陳那による 般若波羅蜜多の分類	三宝尊による 四清浄法の呼称	『摂大乘論』における 四清浄法の呼称
(I) 第一義的なもの	(1) 無二智	[1] 自性清浄	[1] 自性清浄
		[2] 離垢清浄	[2] 離垢清浄
(II) 第二義的なもの	(2) [修行]道 (lam)	[3] 所縁 (dming pa) 清浄	[3] 得此道 (lam) 清浄
	(3) [経]の 本文	[4] 平等清浄	[4] 生此境 (dming pa) 清浄

以下には、『摂大乘論』と比較しながら、三宝尊による「四種の明浄なるもの」の個々の説明について見ていく。

まず、[1]「本来的に清らかなもの」(自性清浄)について、三宝尊は以下のように解説する。

PrPPSV G431a6-431b2/ P349a2-4/ N350a5-7/ D305b5-7/ C312b5f:

このうち、^[1] 本来的に清らかなもの (rang bzhin gyis mam par byang ba, 自性清浄, *prakṛtviśuddhi-/°vyavadāna-) と説かれるものは、あらゆる [事物] のうちで、[否定されずに] 残されたもの (lhag mar gyur pa, *pariśiṣṭa-) であるから、[所取と能取という] 二つのものを有しない知覚 (gnýis med pa'i rtogs pa, 無二之智, *advayasamvedana-) である。本来的 [なもの] (rang bzhin, 自性, *prakṛti-) とは、本性 (rang gi ngo bo, 本性, *svabhāva-) であって、虚構でないもの (bcos bu ma yin pa, 不虛假, *akṛtrima-) であって、それ自体のあり方 (bdag nyid kyi rang bzhin, 真我性, *ātmiyo bhāvaḥ) に他ならない。よって、そ[の二つのものを有しない知覚]の本質である (de'i bdag nyid yin pa, *tādātmya-) がゆえに、摩尼宝 (nor bu rin po che, 摩尼寶, *mañiratna-) のように [清らかなものである。] 何が意図されてい

るのか [たとえば、ここでは、] 世尊によって「あらゆる生類 (sems can, 衆生, *sattva-) は、如来を孕んでいる (de bzhin gshegs pa'i snying po can, 如来藏, *tathāgatagarbha-)。そして、あらゆる事物 (chos, 法, *dharma-) も、如来と等しい (de bzhin gshegs pa dang 'dra ba, 興善逝等)。[というのも、あらゆる事物の本体は、] 無自性 [性] (=二つのものを有しない知覚) である [からである]」云々ということが説かれているのである。【T25, 907a8-13】

患者の智 (依他起性) は、未だ清められていない智である。そして、未だ清められていない智は、換言すれば、所取・能取という二つのものの顕現である。しかるに、二つのものの顕現は、無明により何らかの変容を遂げた無二智 (円成実性) と考えられていた。⁵¹ゆえに、あらゆる生類は、煩惱障と所知障という穢れを有して未だ解脱しておらずとも、潜在的には無二智を有していることになる。そして、この無二智は、如来である⁵²。よって、あらゆる生類は、如来を孕んでいる (如来藏) と言える。

また、あらゆる事物 (遍計所執性) は、多様なあり方で顕現しているものに対して付託された概念である。しかるに、多様な事物の本体は、無二智 (円成実性) であった。⁵³ゆえに、世俗の智からすれば、多様に見える事物も、最高の智からすれば、単一な無二智 (=無自性性) にほかならないことになる⁵⁴。そして、やはり、この無二智は如来である。よって、あらゆる事物の本体は如来であると言える。すなわち、あらゆる事物も本来的には如来と同じであるというのである。

なお、これについて、『摂大乘論』においては、以下のように解説されている——「本来的に清らかなもの (自性清淨, *prakṛtisuddhi-) とは、すなわち、真如 (*tathatā-) ⁵⁵や空性 (*śūnyatā-) や真実の極致

⁵¹ 小稿 §2・拙稿 [2019; p. (15), l. 4-p. (17), l. 3] 参照。

⁵² 註6参照。

⁵³ 註51参照。

⁵⁴ 拙稿 [2017; p. (23), l. 6-p. (35), l. 11] 参照。

⁵⁵ Cf. MAVBh 23, 20: *ananyathārthena tathātā nīyaṃ tathaiyeti kṛtvā* ([空性は、] 別の様態を有しないという意味で真如である。[何となれば、空性は、] 常に、そのままであるからである) ; MAVṬ 50, 7ff.: *ananyathārthena tathateti, avikārārthenety artha<h. tad eva pradarśanārtham āha — nīyaṃ tathaiyeti kṛtveti. nīyaṃ sarvadāsaṃskṛita>tvān na vikriyata ity arthaḥ* ([空性は、] 別の様態を有しないという意味で、真如である) とは、[空性は、] 変化しないという意味で [真如である] という意味である。まさしくそのことを説示せんがために曰く——「[空性は、] 常に、そのままであるからである」と。[空性は、諸条件によって] 作られたものでないものであるがゆえに、「常に」[すなわち、] 何時であらうとも、変化しない [からである]、という意味である)。

(*bhūtaḥkoṭi-) ⁵⁶や特徴を有しないこと (*animitta-) ⁵⁷や最高の [智の] 対象 (*paramārtha-) ⁵⁸であって、

⁵⁶ Cf. MAVBh 23, 20f.: aviparyāsārthena bhūtaḥkoṭiḥ viparyāsāvastutvāt ([空性 (= 真如) は、] 倒錯を伴わない (= 誤って構想されない) という意味で、真実の極致である。[何となれば、空性 (= 真如) は、] 倒錯 (= 誤った構想) の原因 (= 認識対象) とならないからである。) ; MAVṬ 50, 9-15: **aviparyāsārthena bhūtaḥkoṭiḥ. bhūtaḥ** satyam aviparītam ity arthaḥ. **koṭiḥ** paryanto yataḥ pareṇānyaj jñeyam nāstīty ato **bhūtaḥkoṭi**<r bhūta-paryanta ucyaṭe. *kathaḃ tathaṭā jñeyam ucyaṭe. jñeyāvaraṇaviśodhanajñānagocaravāt.*> **aviparyāsārthenety** anadhyāropānapavādārthena. atrāiva kāraṇaḃ āha — **viparyāsāvastutvād iti. viparyāso hi vikalpaḥ. vikalpānālabhanatvān na viparyāsavastu** ([空性 (= 真如) は、] 倒錯を伴わない (= 誤って構想されない) という意味で、真実の極致である) [と云われる。] 「真実」とは、顛倒のない真理という意味である。「極致」とは、極限 [という意味] である。[空性はなぜ真実の極致と呼ばれるのかと言えば、空性 (= 無二智) とは] 別の、[空性 (= 無二智と自己認識) とは] 別のものよって知られるべきものが、存在しないがゆえに、そのゆえに [空性 (= 無二智) が] 「真実の極致」[すなわち] 真実の極限と呼ばれるのである。 [問] 真如 (= 空性) が、どうして、知られるべきものと呼ばれるのか—— [答] [何となれば、真如 (= 空性) は、] 知られるべきものを覆い隠すもの (*jñeyāvaraṇa-, 所知障) を除き清める智 (*viśodhanajñāna-) の対象領域 (*gacara-) であるからである。 [倒錯を伴わない (= 誤って構想されない) という意味で] とは、[存在しないものを存在すると] 過剰に肯定する [構想] も伴わず (anadhyāropa-)、[存在するものを存在しないと] 過剰に否定する [構想] も伴わない (anapavāda-)、という意味で [という意味である。] その理由を [述べて] 曰く—— 「真如 (= 空性) は、] 倒錯の原因とならないからである」と。実に、「倒錯」(viparyāsa-) とは、[誤った] 構想 (vikalpa-) である。[真如 (= 空性) は、概念的] 構想の認識対象 (ālabhana-) でないがゆえに、倒錯の原因でないのである) 。

⁵⁷ Cf. MAVBh 23, 21f.: nimittanīrodhārthenānimittam sarvvanimittābhāvāt ([空性は、] 特徴が消滅しているという意味で、特徴を有しないものである。[何となれば、空性には、] 如何なる特徴も存在しないからである) ; MAVṬ 50, 15-20: **nimittanīrodhā<rthenānimittam iti. atrānimittatvaḃ nimittanīrodha ucyaṭe. etad eva pradarśanārtham āha — sarva>nimittābhāvād iti. sarvāir eva saṃskṛtasaṃskṛtanimittaiḥ śūnyatā śūnyety animittam ucyaṭe. sarvanimittābhāvād animittaiḥ** ([空性は、] 特徴が消滅しているという意味で、特徴を有しないものである) [と云われる。] ここにおいては、特徴を有しないということが、「特徴が消滅している」と言われている。まさにそのことを説明さんがために曰く—— 「[何となれば、空性には、] 如何なる特徴も存在しないからである」と。空性は、まさしく全ての [特徴] について、[すなわち、] 有為 [という特徴について] も無為 (有為) の対概念であるところ [無為] という特徴についても空であるがゆえに、「特徴を有しない」と言われているのである。[つまり、その空性には] 如何なる特徴も存在しないから、[空性は] 特徴を有しないものなのである) 。

⁵⁸ Cf. MAVBh 23, 22f.: āryajñānagocaravāt paramārthaḥ. paramajñānaviśayatvād ([空性は、] 聖者の智の対象領域であるがゆえに、最高 [の智] の対象である。[[聖者の智の対象領域であるがゆえに] とは、] 最高の智の対象であるからである [という意味である]) ; MAVṬ 50, 20f.: āryajñānagocara<tvād paramārtha iti. *paramaḃ hi lokottarajñānam. tadarthaḥ paramārthaḥ.*> etad eva pradarśayann āha — **paramajñānagocaravād iti** ([空性は、] 聖者の智の対象領域であるがゆえに、最高 [の智] の対象である) [と云われる。] 実に、「最高 [の智]」とは、出世間智である。[そして、] そ [の出世間智] の対象が、「最高 [の智] の対象」である。まさにそのことを説明せんがために曰く—— 「[空性は、] 最高の智の対象領域であるがゆえに] と) 。

法界 (*dharmadhātu-) ⁵⁹もまた、それ⁶⁰である⁶¹』と。なお、無著は、ここにおいては「如来蔵」について

⁵⁹ Cf. MAVBh 23, 23ff.: āryadharmmahetutvād dharmmadhātuḥ. āryadharmmānān tadālabhanaprabhavatvāt. hetvartho hy atra dhātvarthaḥ (〔空性は、〕聖者が具有する事物 (正見ないし正解脱・正智)の原因であるがゆえに、法界である。〔何となれば、〕聖者たちが具有する事物 (正見ないし正解脱・正智)は、それ (空性)を認識対象として生起するからである。実に、ここにおける [[法界]の]「界」の意味は、原因という意味である) ; MAVT 50, 22-51, 4: āryadharmahetutvād dharmadhātuḥ. dharmasābdenātrāryadharmāḥ. samyagdrīṣṭyā<dayāḥ samyagvimuktijñānaparyantāś ceti. taddhetutvād dhātuḥ. tad e>va vibhāvayann āha — āryadharmāṇām tadālabhanaprabhavatvād iti. svalakṣaṇopādāya rūpadhāraṇe 'py ayam dhātuśabdō vartata ity āha — hetvartho hy atra dhātvarthaḥ. tad yathā — suvarṇadhātus tāmradhātū raupyadhātu<h> (〔空性は、〕聖者が具有する事物 (正見ないし正解脱・正智)の原因であるがゆえに、法界である〕と説かれる。「法界」の〕「法」 (dharma-) という語によっては、聖者が具有する事物 (āryadharma-) が [意味されている。聖者が具有する事物とは、すなわち、] 正見 (samyagdrīṣṭi-) を初めとし、そして、正解脱・〔正〕智 (samyagvimuktijñāna-) を終わりとする [十種の事物] であると [言われる。空性は、] それら (聖者が具有する事物)の原因であるがゆえに、「界」 (dhātu-) [という語があてられている] である。まさしく、このことを明らかにせんがために曰く——「聖者たちが具有する事物 (正見ないし正解脱・正智)は、それ (空性)を認識対象として生起するからである」と。〔さらに、聖者たちが具有する事物 (正見ないし正解脱・正智)の認識対象は、世俗的には] 物質のかたちを取っているとしても、〔最高の智によって見た場合には空性 (≡無二智)という] 独自の特徴 (svalakṣaṇa-) を拠り所としているので、この「界」という語が補充されているということを [示して] 曰く——「実に、ここにおける [[法界]の]「界」の意味は、原因という意味である』と。〔原因の意味で「界」という語を用いるのは、] 例えば、〔金や銅や銀の原料の意味で] 金鉱石 (suvarṇadhātu-) や銅鉱石 (tāmradhātu-) や銀鉱石 (raupyadhātu-) [という語を用いるのと同じ用法] である) . Cf. 『集異門足論』T26, 452c11-14: 十無學法者、云何爲十。答。一無學正見。二無學正思惟。三無學正語。四無學正業。五無學正命。六無學正勤。七無學正念。八無學正定。九無學正解脱。十無學正智。; 『集異門足論』T26, 453a23-27: 云何無學正解脱。答。諸聖弟子、於苦思惟苦、於集思惟集、於滅思惟滅、於道思惟道、無學作意相應所有心勝解已勝解當勝解、是名無學正解脱。云何無學正智。答。盡智・無生智、是名無學正智。

⁶⁰ Cf. MAVBh 23, 13ff.: katham paryāyo vijñeyāḥ. tathatā bhūtakoṭīś cānimittam paramārthatā/ dharmmadhātuś ca paryāyāḥ sūnyatāyāḥ samāsataḥ// [I. 14] (〔問〕〔「空性」の〕同義語は、どのように知られるべきか。〔答〕「空性」の同義語は、要略すると、真如であり、真実の極致であり、特徴を有しないものであり、最高 [の智] の対象であることであり、そして、法界である。); MAVT 49, 25-50, 3: etac ca paryāyapañcakam yathā pradhānam gāthāyām uktam<> evam anye 'pi paryāyā ihānuktāḥ pravacanād upadhāryāḥ. tad yathā — advayatā, avikalpadhātuḥ, dharmatā, anabhilāpyatā, anirodhaḥ, asaṃskṛitam nirvāṇādi (しかるに、〔「空性」の同義語のうち、] 偈文に説かれている主要なものは、以上の5つの同義語であるが、同じようにして、こ [の偈文] に説かれていない別の同義語もまた、聖典から考慮されるべきである。〔その別の同義語とは、] すなわち、〔所取・能取という] 二つのものを有しないことや無分別界や法性や表現されえないことや不滅や無為 (〔有為〕と「無為」という対概念を超越した無為) や涅槃などである) .

⁶¹ MS P21a8/ D19a2f.: rang bzhin gyis (gyis D; gyi P) mnam par byang ba ni 'di lta ste/ de bzhin ^[P21b1] nyid dang / stong pa nyid dang / yang dag pa'i mtha' dang / mtshan ma med pa dang / don dam pa ste/ ^[D19a3] chos kyi dbyings kyang de yin no// .

言及せず、「空性」という語やその同義語を羅列するのみであるが、世親は、これを註釈する際に、以下のようなかたちで「如來藏」について言及している——「それ（本来的に清らかなもの＝空性）は、あらゆる生類(*sattva-)に共通する特徴(*sāmānyalakṣaṇa-)として存在するがゆえに、あらゆる事物(*dharma-)は、如來を孕むもの（如來藏,*tathāgatagarbha-)である⁶²」と。

無著の『攝大乘論』の記述からも分かる通り、「本来的に清らかなもの」は、伝統的には「空性」と理解されてきた。そして、この「空性」は、「無我性」(nairātmya-)や「無自性性」(*niḥsvabhāvatā-)とも言い換えることができる。ところで、この「無我性」なるあり方は、有漏の有為法にのみ共通する「苦性」・有漏と無漏の有為法にのみ共通する「無常性」・無為法の一部にのみ共通する「寂靜性」などに対して、有為法と無漏法を合わせた一切の事物に共通するあり方である⁶³。そして、「無我性」「無自性性」ないし「空性」は、一切の事物において成立しているがゆえに、「最高のもの」(parama-)であると理解される⁶⁴。さらに、「最高のもの」は最高の人である「如來」に比される。よって、世親の言うように、山川草木などといったあらゆる事物は、空性を共通の特徴として有するがゆえに、「如來を孕んでいる」あるいは「悉く仏性を有している」と言うことができる⁶⁵。勿論、あらゆる事物が空性を共通の特徴として有

⁶² MSBh P180a6f./ D151a1f.: *sems can thams cad* ^[D151a2] *la* ^[P180a7] *spyi'i mtsan nyid kyis de ni yod pa nyid kyī phyir chos thams cad ni de bzhin gshegs pa'i snying po can zhes gsungs so//*

⁶³ Cf. MAVBh 67, 10f.: na hi dharmanairātmyena vinā kaścīd dharmo vidyate, tasmād dharmadhātuh sarva-dharmānām sāmānyam laksanam iti (実に、[あらゆる] 事物が本性を欠いているということ (dharmānairātmya-) なしには、いかなる 事物 (dharma-) も存在しない。そのゆえに [あらゆる事物が本性を欠いていることという] 法界 (dharmadhātu-) が、あらゆる事物に共通の特徴 (sāmānyalakṣaṇa-) と [言われるのである])。拙稿 [2018; 註 29] 参照。

⁶⁴ Cf. MSAVBh P84a8f./ D74a4: *de bzhin nyid la* (de bzhin nyid la D; de bzhin nyid P) *ci'i phyir don dam pa zhes bya zhe na/ 'phags pa'i lam bsgoms pa'i 'bras bu yin pas don zhes bya la/ chos thams cad* ^[P84b1] *du gyur pas dam pa zhes bya'o/* (なにゆえに、真如 (=空性) を「勝義」(don dam pa, *paramārtha-) というのか、と [対論者が問うので] 曰く—— [「真如」は、] 聖 [者] の道 ('phag pa'i lam, *āryamārga-) を修習した結果 ('bras bu, *phala-) [として獲得される智慧] であるがゆえに、「目的」(don, *artha-) である。そして、[その智慧は、] あらゆる事物に対して成立しているがゆえに、「最高」と言われる。[よって、「真如」は「勝義」(最高の智慧という目的) である])。この論法に従えば、あらゆる事物に共通して成立している「空性」もまた、「最高のもの」ということになろう。

⁶⁵ MSBh P180a7f./ D151a2f.: dri ma med pas rnam par byang ba zhes bya ba ni de bzhin nyid de nyid ^[P180a8] *nyon mongs pa dang shes bya'i sgrīb pa zhes bya ba'i* (zhes bya ba'i D; zhes bya ba P) dri ma dang bral bar gyur pa'i phyir gang rnam par dag pa'i de bzhin ^[D151a3] *nyid kyis rab tu phyē ba'i sangs rgyas nyid do//* (「穢れを離れていることにより清らかなもの」(*vaimalya-viśuddhi-) とは、その同じ真如 (*tathatā-) (=本来的に清らかなもの) が、煩惱 [障] と所知障と呼ばれる「穢れ」を離れることにより、清浄なる真如として発現している [場合、その発現している] 仏性 (sangs rgyas nyid, 諸佛, *buddhatā-) [が、穢れを離れていることにより清らかなもの] である)。

(70)

するのであれば、それらにより構成されるあらゆる生類もまた、空性を共通の特徴として有するがゆえに、「如来を孕んでいる」あるいは「悉く仏性を有している」と言うことができる。

なお、以上の世親説は、「もろもろ事物が自相 (svalakṣaṇa-) により区別され、そのようにして区別される一切の事物に空性という共相 (sāmanyalakṣaṇa-) がある」という世俗の智による認識の観点から表述されたものである。しかし、世俗の智によって共相と思われている空性は、最高の智によって知られる場合には自相にほかならない⁶⁶。よって、これと同じ事柄は、最高の智による認識の観点から表述すると、あらゆる事物の本体は「無自性性」ないし「空性」であるがゆえに、あらゆる事物の本体は「如来」ないし「仏性」と同じであると言い換えられる⁶⁷。ゆえに、三宝尊説は、世親によって意図されたことと同じことを最高の智による認識の観点から表述したものであることになる。

次に、[2]「穢れから離れることにより清らかなもの」(離垢清淨) について、三宝尊は以下のように解説する。

PrPPSV G431b2-4/ P349a4-6/ N350a7-350b2/ D305b7-306a1/ C312b6-313a1:

また、^[2]穢れを離れることにより清らかなもの (dri ma med pa'i rnam par byang ba, 離垢清淨, *vaimalya-viśuddhi-/vyavadāna-) と説かれるものは、何であれ、[煩惱障と所知障という穢れに] 対抗する道 (gnyen po'i lam, 所行對治, *pratipakṣamārga-) を修習したことによる力 (bsgom pa'i stobs, *bhāvanābala-) によって、ヨーガ行者 (mal 'byor ba, 相應, *yogin-) たちに [所取と能取という] 二つのものを有しない智 (gnyis med pa'i shes pa, 無二之智, *advayajñāna-) が現れる場合、そ [のヨーガ行者たちに現れた二つのものを有しない智] が穢れを離れることにより清らかなものである。穢れを離れること (dri

⁶⁶ 拙稿 [2017; § 3] 参照。

⁶⁷ 世俗の智による認識からすると、あらゆる事物はそれぞれの自相を有し、それらの事物には共相として悉く空性が存すると理解される。しかるに、最高の智による認識からすると、世俗で自相を有すると思われている事物 (遍計所執性) は概念に過ぎず、世俗で共相と思われている空性 (円成実性) のほうが、むしろ、勝義の自相であると理解される。このことから、遍計所執性である事物の本体は、とりもなせず、円成実性である空性 (世俗の共相)、すなわち、無二智 (勝義の自相) と認められることになる。よって、「あらゆる事物 [の本体] は、無自性性であるがゆえに、如来と同じである」と言えることになる。しかしながら、生類を論題とするときには、その内に包含される依他起性の問題を考えなければならなくなる。依他起性である所取・能取の顕現は、円成実性である無二智の上に展開するものではあるが、それらを同一視することは、古来、容認されていない。というのも、依他起性は、そもそも、最高の智によって認識されないからである (拙稿 [2017; 註 14・註 35] 参照)。したがって、「あらゆる生類は、無自性性の上に顕現しているがゆえに、如来を孕むものである」と言うことはできるが、「あらゆる生類は、無自性性であるがゆえに、如来と同じである」ということは、最高の智による認識という観点からの表述として言い過ぎとなる。

ma med pa, 離垢, *vaimalya-) [によって、すなわち、] 穢れから離脱すること (dri ma dang bral ba nyid, 離諸垢染) によって、清らかで清浄である、という仕方でも [、この複合語は解釈される] 【依主釈：格限定複合語】。何が意図されているのか [と云えば、ここでは、] 世尊によって [「その無自性性 (= 二つのものを有しない智) は、] 真実の極致 (yang dag pa'i mtha', 實際, *bhūtakoti-) ⁶⁸であり、真如 (de bzhin nyid, 真如, *tathatā-) ⁶⁹であり、法界 (chos kyi dbyings, 法界, *dharmadhātu-) ⁷⁰である」云々ということが説かれているのである。【T25, 907a13-17】

先には、煩惱障と所知障という穢れを有して未だ解脱していない生類における潜在的な無二智が語られたが、ここでは、煩惱障と所知障という穢れを離れた無二智が語られている。

なお、これについて、『摂大乘論』においては、以下のように解説されている——「穢れを離れていることにより清らかなもの (離垢清浄, *vaimalyavisuddhi-) とは、すなわち、その同じもの (本来的に清らかなもの) がすべての覆い隠すもの (*āvaraṇa-) を有しない [状態となる] ことである⁷¹」と。

それでは、煩惱障と所知障という穢れを離れた無二智という結果は如何にして実現されるのか。その原因を示すために、三宝尊は、[3] 「[修行の] 拠り所という清らかなもの (所縁清浄) について、以下のように解説する。

PrPPSV G431b4f./ P349a6f./ N350b2f./ D306a1-3/ C313a1f.:

^[3] [修行の] 拠り所という清らかなもの (dmigs pa'i rnam par byang ba, 所縁清浄, *ālabanavisuddhi-/°vyavadāna-) の内容として説かれるものは、すべての般若波羅蜜多 (完成した智慧を顕在化させるための修行) の内容 (shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i don., 般若波羅蜜多義, *prajñāpāramitārtha-) である。何となれば、それ (完成した智慧を顕在化させるための修行の内容) は、[菩薩によって] 拠られるべきもの (dmigs par bya, 所縁, *ālambya-) であり、[菩薩の] 活動領域となるもの (yul du byed pa, 境界作用, *viṣayīkaraṇa-) であるがゆえに、そのゆえに、拠り所 (dmigs pa, 所縁, *ālabana-) である。 [そして、] そ [の拠り所 (= 完成した智慧を顕在化させるための修行の内容)] は、清らかなものであり、清浄なるものである 【持業釈：同格限定複合語】。 [何となれば、その拠り所 (= 完成

⁶⁸ 註 56 参照。

⁶⁹ 註 55 参照。

⁷⁰ 註 59 参照。

⁷¹ MS P21b1f./ D19a3: dri ma med par rnam par byang ba ni 'di lta ste/ de nyid sgrib pa thams cad dang mi ldan [P21b2] pa'o//.

した智慧を顕現させるための修行の内容)は、] それ(穢れを離れた無二智)を獲得せしむるものである(所得性)からであり、あるいは、それ(穢れを離れた無二智)に到達せしむるものである(所成性)からである。【T25, 907a17-21】

なお、これについて、『摂大乘論』においては、以下のように解説されている——「それ(穢れを離れていることにより清らかなもの)を獲得するための道という清らかなもの(得此道清淨)とは、すなわち、すべての菩提分法(*bodhipakṣyadharmā-)、そして、波羅蜜多(*pāramitā-)などである⁷²⁾と。

先述の通り、無二智を顕在化させるための修行道としての般若波羅蜜多について、三宝尊は、これを「拠り所」(所縁,*ālambana-)と呼び、無著は、これをそのまま「道」(*mārga-)と呼ぶが、両者が指し示す内容はいずれも修行道であることに違いはない。

それでは、さらに、その無二智を顕在化させるための修行道は如何にして成立するのか。その原因を示すために、三宝尊は、[4]「[法界から] 生じ [法界と] 同じ性質を有する [結果] という清らかなもの」(平等清淨)について、以下のように解説する。

PrPPSV G431b5-432a1/ P349a8-349b2/ N350b3-5/ D306a3f/ C313a2-4:

^[4] [法界から] 生じ [法界と] 同じ性質を有する [結果] (等流) という清らかなもの (rgyu mthun pa'i rnam par byang ba, 平等清淨,*niḥṣyandaviśuddhi-/°vyavadāna-) と説かれるものは、極めて清淨なる法界 [という原因] から生じ [法界と] 同じ清らかな性質を有する [結果] (shin tu rnam par dag pa'i chos kyi dbyings kyi rgyu mthun pa, 平等微妙清淨法界,*suviśuddhadharmadhātuni-<h>syanda-) である [大乘において] 説かれた教え (bstan pa'i chos, 大法,*deśanādharmā-) ⁷³⁾として顕現しているものである。

[大乘において説かれた教えとして顕現しているものが、等流(法界から生じ法界と同じ性質を有する結果)と説かれるのは、大乘において説かれた教えとして顕現しているものが、] それ(極めて清淨なる法界) から生じ [法界と同じ性質を有し] たものである (rgyu mthun pa,*niḥṣyandatva-) からである。そして、それと全く同じ [理由] (極めて清淨なる法界 [から生じ法界] と同じ性質を有したものであること) により、[大乘において説かれた教えとして顕現しているものは、] 清らかで、完

⁷²⁾ MS P21b2/ D19a3: de thob pa'i lam rnam par byang ba ni 'di lta ste/ byang chub kyi phyogs dang mthun pa'i chos thams cad dang / pha rol tu phyin pa la sogs pa'o//.

⁷³⁾ Cf. MAVṬ 229, 5ff.: mahāyānādeśanādharmāḥ suviśuddhadharmadhātuniśyandatvād viparyāsapratipakṣāḥ lambanatvāc ca pariṇipannaḥ svabhāva itī ucyate (大乘において説かれている教えは、清らかな法界 [という原因] から生じた [法界と同じ清らかな性質を有する結果] であるがゆえに、あるいは、顛倒 [智] に対抗する [智] の認識対象であるがゆえに、完成した独立する存在であると説かれるのである) .

全に清浄なるものである【持業積：同格限定複合語】。[というのも、] 等流 [果] (rgyu mthun pa, *niḥ-syanda-) は、[原因と] 類似した結果 ('dra ba'i 'bras bu, *sadr̥saphala-) である⁷⁴と [言われるからである。] このようにして、以上の 4 種の明浄なるものによって [世尊は] この『般若波羅蜜多 [経]』において完成したものを陳述なさっているのである、というのが [偈] 文の内容である。【T25, 907a21-26】

なお、これについて、『撰大乘論』においては、以下のように解説されている——「それ（道という清らかなもの）を生起させるための拠り所という清らかなもの（生此境清浄）とは、すなわち、大乘において説かれている正しい教え（*mahāyānadeśanāsaddharma-）である。以上のように、これ（拠り所という清らかなもの＝大乘の教え）は、[道という] 清らかなもの [を生起させるため] の原因であるがゆえに、完全に [誤って] 構想されているもの（遍計所執自性, *parikalpita-）ではない。[また、これ（拠り所という清らかなもの＝大乘の教え）は、] 清らかな法界 [という原因] から生じ [法界と] 同じ [清らかな] 性質を有する⁷⁵[結果] である（*viśuddhadharmadhātuni<ḥ>syandatva-）⁷⁶がゆえに、他に依存するもの（gzhan gyi dbang, 依他起自性, *paratantra-）でもない⁷⁷」と。

やはり、先述の通り、修行道を成立させる経としての般若波羅蜜多について、三宝尊は、これを「[法界から] 生じ [法界と] 同じ性質を有する [結果]」（等流, *niḥsyanda-）と呼び、無著は、むしろ、こちらのほうを「拠り所」（*ālabana-）と呼ぶが、両者が指し示す内容はいずれも『般若波羅蜜多経』であることに違いはない。

このようにして、三性と『般若波羅蜜多経』との関係性が一般的に解説されたところで、次には、この三性が『般若波羅蜜多経』の中で如何にして示されているかの具体的解説がなされるが、これ以下の和訳については別稿を期す。

⁷⁴ AKBh 95, 18f.: niḥsyando hehusadr̥śaḥ [AK II. 57a] hetor yaḥ sadr̥śo dharmāḥ sa niḥsyandaphalam (等流 [果] とは、原因と類似した [結果] である。[AK II. 57a] [結果として生じた] 或る事物 (A) が原因と類似している場合、そ [の事物] (A) は等流果である) .

⁷⁵ 註 74 参照。

⁷⁶ 註 73 参照。

⁷⁷ MS P21b2f./ D19a3f.: de bskyed pa'i phyir dmigs [D19a4] pa nam par byang ba ni 'di [P21b3] lta ste/ theg pa chen po'i dam pa'i chos bstan pa ste/'di ltar de ni nam par byang ba'i rgyu yin pa'i phyir kun tu brtags pa ma yin no// chos kyi dbyings nam par dag pa'i rgyu mthun pa (chos kyi dbyings nam par dag pa'i rgyu mthun pa D; chos kyi dbyings dag pa'i rgyu mthun pa P) yin pas (yin pas D; yin P) gzhan gyi dbang ma yin no//.

(74)

略号

- 『集異門足論』 玄奘訳『阿毘達磨集異門足論』 T26, No. 1536。
- AAJP *Anekāntajayapātākā-* (Haribhadra Sūri-).
"Anekāntajayapātākā by Haribhadra Sūri: with his own commentary and Muncindra Sūri's supercommentary," Critically edited with introd. notes and appendices by H.R. Kapadia, Baroda : Oriental Institute, 1947.
- AKBh *Abhidharmakośabhāṣya-* (Vasubandhu-).
"Abhidharma-Kośabhāṣya of Vasubandhu," ed. P. PRADHAN, Patna : K. P. Jayaswal Research Institute, 1967.
- C *Co ne bstan 'gyur.*
- D デルゲ版西藏大藏經。
高野山大学附属図書館監修『デルゲ版西藏大藏經 DVD-ROM 版』大阪：小林写真工業株式会社。
- G *dGa' ldan gser bris bstan 'gyur (dGa' ldan Golden Manuscript bsTan 'gyur).*
- MAVBh *Madhyāntavibhāgaḥāṣya-* (Vasubandhu-).
"Madhyāntavibhāga-bhāṣya: A buddhist philosophical treatise edited for the first time from a sanskrit manuscript," ed. Gajin M. Nagao, Tokya : Suzuki Research Foundation, 1964.
- MAVṬ *Madhyāntavibhāgaṭīkā-* (Sthiramati-).
"Madhyāntavibhāgaṭīkā: Exposition systématique du yogācāravijñātivāda," éd. Susumu Yamaguchi, Nagoya : Hajinkaku, 1934.
- MAVṬ (Tib) *Madhyāntavibhāgaṭīkā-*, Tibetan translation: dBus dang mtha' rnam par 'byed pa'i 'grel bshad (Sthiramati-).
Qv. P No. 5534./ D No. 4032.
- MS *Mahāyānasamgraha-*, Tibetan translation: Theg pa chen po bsdu pa (Asaṅga-).
Qv. P No. 5549./ D No. 4048.
- MSBh *Mahāyānasamgrahabhāṣya-*, Tibetan translation: Theg pa chen po bsdu pa'i 'grel pa (Vasubandhu-).
Qv. P No. 5551./ D No. 4050.
- MSAVBh *Mahāyānasūtrālamkāravṛttibhāṣya-*, Tibetan translation: mDo sde rgyan gyi 'grel bshad

- (Sthiramati-).
Qv. P No. 5531./ D No. 4034.
- MSAVy *Mahāyānasūtrālamkāravayākhyā-* (Vasubandhu-).
"Mahāyāna-Sūtrālamkāra: exposé de la doctrine du Grand Véhicule selon le système Yogācāra," éd. Sylvain LÉVI, Paris : H. Champion, 1907-1911.
- MSBh *Mahāyānasamgrahabhāṣya-*, Tibetan translation: Theg pa chen po bsdus pa'i 'grel pa (Vasubandhu-).
Qv. P Li No. 5551/ D Ri No. 4050.
- MSU *Mahāyānasamgrahopanibandhana-*, Tibetan translation: Theg pa chen po bsdus pa'i bshad sbyar (Asvabhāva-).
Qv. P No. 5552./ D No. 4051.
- N *sNar thang bstan 'gyur.*
- P 北京版西藏大藏經。
"Tibetan Tripitaka, Peking edition," Tokyo : Tibetan Tripitaka Research Institute, 1955-58.
- PrPPS *Prajñāpāramitāpiṇḍārthasamgraha-* (Dignāga-).
Dignāga, sein Werk und seine Entwicklung, ed. Erich FRAUWALLNER, "Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens," Vol. 3, p. 140-p. 144, Wien : Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 1953.
- PrPPSV *Prajñāpāramitāpiṇḍārthasamgrahavivaraṇa-*, Tibetan translation: 'Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin ma bsdus pa'i tshig le'ur bya pa'i rnam par 'grel pa (Triratnadāsa-).
Qv. G sher phyin Pha/ P sher phyin Pha No. 5208/ N sher phyin Pha No. 3981/ D sher phyin Pha No. 3810/ C sher phyin Pha.
- T 大正新脩大藏經。
高楠順次郎編輯『大正新脩大藏經』東京：大正一切經刊行會、1924-1934。
- 大竹 晋 [2009] 『新国訳大藏經 釈経論部 19：能断金剛般若波羅蜜多経論釈 他』東京：大蔵出版。
- 飛田 康裕 [2017] 『般若心経』の秘められた意図：瑜伽行派文献における「十種散乱」を手がかりに』『早稲田大学高等学院研究年誌』第 61 号、p.(1)-p.(40)、東京：早稲田大学高等学院。

(76)

- 飛田 康裕 [2018] 「『般若心経』の秘められた真実：瑜伽行派文献における「十種散乱」を手がかりに」『早稲田大学高等学院研究年誌』第 62 号、p.(9)-p.(66)、東京：早稲田大学高等学院。
- 飛田 康裕 [2019] 「円成実性を基軸とする三性説の特徴と思想史上の意義について：三宝尊『仏母般若波羅蜜多円集要義論註』における三性説」『早稲田大学高等学院研究年誌』第 63 号、p.(9)-p.(44)、東京：早稲田大学高等学院。
- 飛田 康裕 [2020] 「三宝尊『仏母般若波羅蜜多円集要義積論』の和訳：十種分別散乱総説、無相分別散乱、および、有相分別散乱」『早稲田大学高等学院研究年誌』第 64 号、p.(41)-p.(78)、東京：早稲田大学高等学院。
- 服部 正明 [1961] 「ディグナーガの般若経解釈」『大阪府立大学紀要(人文・社会科学)』第 9 巻、p. 119-p. 136、大阪：大阪府立大学。
- 兵藤 和夫 [2006] 「三性説と唯識無境：『中辺分別論』と『摂大乘論』」『大谷大学研究年報』第 58 号、p. 1-p. 70、京都：大谷大学。

※拙稿 [2020] 正誤表

頁・行	誤		正
p. (42), l. 28f.	Lama Chimpa, etc. [1070] 参照。	→	Lama Chimpa, etc. [1970] 参照。
p. (43), l. 26	(PrPPS) の著者	→	(PrPPSV) の著者
p. (55), l. 18	[存在しないものを] 存在しない [と	→	[存在するものを] 存在しない [と
p. (56), l. 18	dngos po med pa'i rang bzhin du	→	med pa'i rang bzhin du
p. (56), l. 18	そ [の存在しないものを存在する	→	そ [の存在するものを存在しない
p. (57), l. 27	[存在しないものを] 存在しない [と	→	[存在するものを] 存在しない [と
p. (66), l. 8	有相分別散乱を表すと理解する。	→	無相分別散乱を表すと理解する。
p. (70), l. 6f.	智慧 (shes rab, *prajñā-) よって	→	智慧 (shes rab, *prajñā-) によって
p. (75), l. 9	phyi rol lta bur snagn ba nang na yod pa	→	phyi rol lta bur snang ba nang na yod pa

小稿は、早稲田大学特定課題研究助成費 (2021C-348) の成果の一部である。